

ISSN 0917-3889

INSTITUTE OF REGIONAL AGRICULTURE IN HOKKAIDO

地域と農業

会報

第 44 号

Jan. 2002

特集 国際化の新段階と日本農業の戦略

Winter

社団法人 北海道地域農業研究所



霧多布温泉センター



函館市北方民族資料館



岩見沢市獨立科学館



北の大地で芽をだし20年、
今では大地にしづかう根をはり
大きく広がった幹をもつ企業へと育ちました。
北海道で生まれ、北海道で育った私たち、
これからも北海道の歴史と人と未来を見つめつづける
企業であります。

歴史と人と未来を結んで

(おもな業務内容

- 博物館・資料館など展示施設の設計・施工
- パンフレット・カタログなど印刷物の企画・制作
- 映像やコンピュータ装置による観光案内施設
- 看板・標示板などのサイン計画

gb 株式会社 現代ビューロー[®]
GENDAI BUREAU CO.,LTD.

Tel 011-231-6049 FAX 011-222-6149

地域と農業

Vol. 44

表紙写真：音更町駒場

—— 目 次 ——

提供：山田 精一



2

み
観
察

韓国農業の直面する課題をかいま見て

北海道地域農業研究所 常務理事 黒澤不二男

5

特 集

平成13年度 地域農業問題総合研修会

国際化の新段階と日本農業の戦略

日本女子大学 教授 今村奈良臣

35

ときの話題

カット野菜の現状と展望

北海道大学大学院農学研究科 研究生 杉村 泰彦

47

Essay

「田舎って、どんなところ？」－その4－

カントリーマーケット 里贈人 粟井 文子

51

連載 No. 27

あのマチこのムラ地域おこし活躍中
黒松内町の事例

特別研究員 横山 瑛

61

特別寄稿

<番外編>
東京における大衆酒場の一般形態
－首都東部および北部を中心に－

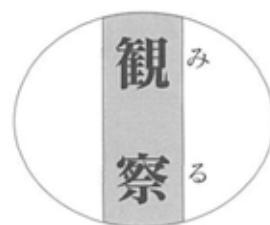
碓田 素州

67

お知らせ・掲示板

68

DATA FILE



韓国農業の直面する課題をかいま見て

(社) 北海道地域農業研究所 常務理事 黒澤 不二男

昨年一〇月の初旬、「日韓農業シンポジウム」に参加のため韓国北部の江原道（カンウォンド）を訪れた。

このシンポジウムは、日本側が北海道大学農学部農業経済学科のスタッフを中心に道内の各大学や研究機関の研究者の有志と、韓国側では江原大学スタッフを主体とする韓国側研究者が、相互の研究交流によって両国農業に関わる実践的課題についてアプローチしようというもので、昨年の開催で八回を数えている。両国で交互に開催することを原則としており、昨年は札幌市（北大）と栗山町（韓国からの参加者を迎えた）、昨年一〇月は韓国の江原道の春川市（チュンチヨン市）と楊口郡（ヤングー郡）で開催された。

なお、日本の自治体でいと、「道」は都道府県、「郡」はいくつかの町村の集合体にほぼ相当すると見て良い。今回の訪韓メンバーは北大大学院農学研究科の黒河功教授をキャップとする総勢一〇名で、大学院生や少壮の研究者、また定年退官された老教授などの他、

道外から山形大学の小野教授（農産物市場論）も参加しており多彩な顔ぶれであった。

筆者にとっては道農政部勤務時代の一九九五年に「韓国における肥料・飼料の生産、流通実態」調査のためにソウルと水原市（スウォン市）を訪れて以来のことだ。韓国農業が当時からどのように変貌を遂げたかについて知りたいという思いを抱いての訪韓であった。

まず、空の玄関口が、ソウル郊外の金浦空港から、昨年開港した仁川市（インチヨン）の臨海国際空港に変わっており、その巨大さに驚いたが、アジアやヨーロッパあるいはアメリカなどへのヒトと物流のハブ機能を持つと聞いて、この分野でも日本のお株を奪いつつある韓国の意気込みをひとしお感じさせられたのである。それとソウルを中心とする都市近郊の林立する高層アパート群に象徴される猛烈な人口集中（韓国人の六割に相当すること）を見ただけでも、第二次産業、第三次産業の隆盛ぶりがうかがわれたのであ

る。あの一九九七年に韓国の政治・経済・社会を震撼させた通貨危機により「IMFの管理」のもとに置かれたこととなつたが、その後「構造改革」を断行してその体制から離陸、経済を上昇気流に乗せることに成功したかに見える。

他方、農業分野では、韓国経済の急速な発展に伴い、農業生産がGDPに占める割合は一九四五年時点の五〇・〇%から一九九九年には五・〇%まで低下、農業就業者の比率も同様に一一・〇%となつており、総人口に占める農家人口の割合も九・〇%（日本は八・七%）に低下している。主要農産物の米は、八〇年代前半に自給を達成したが、その後は作付減により一時自給率九〇%前後まで低下、九〇年代前半から営農規模の拡大、単収アップにより自給率は一〇五%に上昇、やや過剰基調となつてゐる。日本と同様に、国民一人あたり米消費量による消費水準の減退が米価の低落傾向を加速する中で、韓国米作農民の農家経済悪化が表面化し、韓国政府が貰い上げの抑制（政府食管からの撤退）方針を打ち出したことと併せて最大の課題となつてゐるようである。

また、一九九四年の農産物市場全面開放が迫つてゐたにも韓国農民の不安感を一層かきたててゐる。つぎに農業粗生産額に占める割合は米が一五%、白菜等の野菜類が一四%、畜産が二二%、果実等が一一%、その他の順となつてゐる。野菜はキムチの材料である白菜が主体であるが、近年は施設野菜のトマト、キュウリ、イチゴ、スイカが急激に伸びてきている他、食生活の欧米化や健康志向の高まりから洋菜類や有機野菜の消費も増加してゐるようである。

これらの現象については韓国を訪れる日本の農業関係者が、都市近郊のビニールハウスが延々と軒を連ねる光景を見て、改めて実感することであろう。さて、今回の「日韓シンポ」の統一テーマである「農産物の产地育成や販売戦略」も、日韓の農業構造の中における青果物の产地育成や販売戦略は双方に共通する重要な課題であるとの認識があつて設定されたと考えられる。

シンポの初日は一〇月一六日、春川市の農協中央会江原地域本部ビルの大会議室で開催されたが、まず第一報告は江原大学の高（コウ）教授による「高冷地野菜の契約栽培現象と発展方向」で、江原道の中でも標高四〇〇m以上の高冷地域は三万一千haで全国高冷地の八四%を占めることから、そこで白菜の契約栽培の実態から、契約栽培の需給調整機能や販売価格の安定化機能を發揮させるための条件を提示した。

第二報告は山形大学の小野教授で、「日本における農産物の产地流通活性化戦略」と題して報告。日本における产地流通の基本的特徴とフードシステムが構造的に変化したことと、それによる产地流通への影響について論究、最後に四点にわたる流通チャネルの展開方針と農協の販売事業体制における課題についても提起した。

第三報告は江原農協地域本部の金（キム）副本部長が「江原道における農協の野菜連合販売事業の成果と課題」について報告。一七農協が取り組む連合販売体制の形成とその成果及び中間総括と今後の課題について紹介した。この対象品目は大根、白菜が五万t（出荷先は系統流通センター、キムチ工場等）、青唐辛子、ピーマン（全国卸売市場）

が二万㌧で契約出荷対応の中で共同規格、低温貯藏による出荷量調節、危険分散等を実現しているが、中間総括では、業務執行体制の整備が不十分なために多くの課題も発生していることであった。

しかし、既存農産物の流通フレーム自体を変革し、各個別農協と組合員生産者の生き残りをかけたシステムであることを強調した。

第四報告はわが研究所の杉村泰彦監修研究員が「日本における青果物規格出荷及びブランド化の実態」と題して報告。我が国における規格出荷の発展とその背景及びブランド化の現段階における到達点を明らかにすることも、規格出荷とブランド化の課題として選果コストの増大や規格の中抜き問題の発生を挙げ、規格簡素化の必要性と内部品質評価の採択について提起した。四つの報告に関する詳細なディスカッションの内容は紙幅の関係で触れることはできなかつが、日本側のコメントナーも加わっての論議は活発なものであつたことを付記しておきたい。

翌二七日は、楊口郡の文化福祉センターに会場を移しての「地域セミナー」に全員で参加した。テーマは「地域農産物価格安定・流通対策問題」で、シンボの韓国側江原大学のスタッフの他、任（イム）楊口郡守（ヤングケンスル郡知事）、金（キム）楊口農協支部長、吳（ウー）農業者協議会会長他の農業関係者併せて五〇余名が参加し、意見交換と討論が行われた。任（イム）郡守は、韓国においてもWTO体制下のもとで、克服しなければならない多くの課題が山積していることを指摘し、農産物の流通環境が急激に変化しているため、農産物価格の妥当な水準維持のために産地の流通活性化

対策が緊急の課題であることを強調した。また筆者は事例報告の中で、北海道平取町の農協によるトマト産地の育成実践についての取り組みを紹介した。

その後、日本農業の役割と米価政策、農業経営者に対する直接支援策、農産物の生産規模拡大による価格下落にどう対応するかなどについて熱心に討論が交わされた。

最後に、江原大学の河（ハ）教授が、農村問題は、先進国も後進国もそれぞれ課題があり、政府は生産者、生産者団体、研究機関等と一緒にになって課題解決のために努力する必要があることを強調して総括とした。また、セミナー終了後、参加者たちは楊口管内の大規模花き生産農家（日本にも輸出）と韓牛飼育農家を視察した。

今回の訪韓を通して実感したことは、日本（北海道）農業と韓国農業の近似性と、農政施策、農協等における韓国固有のシステムを認識できたことだ。セミナーで取り上げられた青果物の生産流通における系統組織に期待される機能と役割における共通性を確認できただけが大きな収穫であった。日本に対する農産物輸出の側面では日本の農業・農業者と利害が対峙する一面をもちろんが、悪化する農家経済に苦しみ、WTO体制の本格始動を目前にしながら、中国という強大な農産物輸出国の影におびえる韓国農業の一端に触れることができたが、地域セミナーに参加した韓国農業者の真剣な眼差しが強く印象に残った。

また、機会を見て訪韓、韓国の農業者、研究者と膝を交えて懇談できればと考えていた。

講演 基調

国際化の新段階と日本農業の戦略

日本女子大学 教授 今村 奈良臣

七 戸　　この一年間は会員の皆さんとの、地域別の問題関心に密着した議論を深めていたが、その目的に致しました。稻作・畑作・酪農という北海道の農業の三本柱のそれについて、それぞれの地域に出向いて研究会を開くというやり方を取つてまいりましたが、今年はWTOの交渉が開始したこともありまして、グローバルな問題、状況を踏まえて、北海道或いは北海道農業は何をすべきか、こういう共通の課題に絞り込んで議論をしていただく。その為に札幌で全道の方々に集まつていただくことを考えて今回の企画をした次第です。

本日、基調講演をお願いする今村先生は、丁度今から五年前ですが、私達の研究所の五周年記念の時にも特別に講演をお願いいたしまして、世局的な情勢を踏まえた日本農業の問題というのを議論していただきました。先生は曰頃日本の農政の方向付けに関するお仕事をなさっていますが、私達はこれから何をすべきか

ということに関連した示唆的なお話をいただけるものと大いに期待しております。お忙しい中を無理にお願いしたのは、私がかなり強引な友人であるということを盾にとつたのですが、快く朝早くから飛行機に乗つて来てくださいました。大変ありがとうございました。

それからディスカッションですが、「北海道農業の活性化の方策をさぐる」という課題です。これは実に幅広い問題領域に跨っていると思います。つまり北海道農業の活性化というのは北海道経済の活性化でもあり、あるいは北海道に住んでいるものの生活社会文化の活性化とも無縁ではないはずだと思います。ところが、従来はややもしますと豊かな自然に育まれたすぐれた生産物を専ら送り込む。本州や内地に送り込む。どんどん原料を売り込むという形に終始してきたように思います。そういう形での生産の発展のさせ方、或いは流通の発展のさせ方というのは果たして活



今村奈良臣（いまむら ならおみ）さん

1934年 大分県に生まれる
1957年 東京大学農学部農業経済学科卒業
1963年 東京大学大学院博士課程修了 農学博士
(財) 農政調査委員会研究職員
1968年 信州大学助教授（人文学部）
1974年 東京大学助教授（農学部）
1982年 東京大学教授（農学部）
1984～1985年 米国ウィスコンシン大学客員研究員
1994年～現在 日本女子大学教授（家政学部）、東京大学名誉教授、農政審議会専門委員、経済審議会特別委員、国土審議会特別委員、雇用審議会専門委員、日本農業経済学会会長
米価審議会委員、第21回国際農業経済学会議日本大会組織委員会副委員長等を歴任

活性化だったのだろうか。こういったことについて私は非常に深刻な反省をしなければいけない時になつていてると思います。かつてはニシン、或いは木材、バルブ、石炭。石炭などはつい先日ですが、釧路にある日本最後の炭鉱、太平洋炭鉱が閉山するという話を聞いていると思いますけれども、ニシンにしても木材にしても或いは石炭にしても、そういう大量の原料をどんどん供給してきたという歴史を100年以上経過しています。その100年の蓄積が、北海道の今日の活性化を求める状況といつたいうどう関係しているのか。これは大いに考えなくてはならないことだと思います。

原料を供給するということが、一方的な物資の流れで人的な交流にあまり役に立たなかつた。あるいは産業の構造が単一化して、いわゆるモノカルチャーの形になり、そこ自体に活力がなかなか生まれにくかつた。そういう反省を大いにしなければいけないのではないかと思います。つまり豊かに生産し、それを上手に加工し、皆がそれを楽しく味わう。このような循環を重層的に展開するということなしには、活性化というのは難しいのではないかと思つてゐるわけです。もちろんそれには、自然環境の保全や、地域資源の循環的な保全など、いわゆる循環型の農業あるいは循環型の産業を築き上げるということが基本方向だと思います。言わば戦略的に掲げられた基本方向を実現するにはどういう方策が求められているか、これがシンポジウムのテーマになるのだろうと思います。

そういう意味で、基調講演の今村先生のこれから行なわれるお話を含めてですけれども、日本の標準だと世界的な標準とい

うものを、いかに我々は自らのものにし或はそれを乗り越えて、循環型の農業、循環型の経済を実現するといつ基本方向にいかに近づけるか、どういう方策をここで考えなければいけないか。こういうことの議論をして頂ければ大いに役に立つのではないかとういふことを密かに思つております。

I 食糧・農業・農村政策への基本スタンス

今 村 この雪の中、今日来れるかどうか数日前から心配していたのですが、定刻に着き安心しました。今度は帰れるかどうか心配ですが、私が来ている間は絶対大雪は降らないだろ?と思っています。今日はこれから一時間半ほど頂きまして基調講演をさせていただきます。

初めに、三つほどお断りがあります。この頃、私は北海道のことを詳しく現地調査していない、調べていないので自信がないといつことじてこの講演をお断りしたのですが、七五さんは強引な男で、三〇数年来の友達で、冗談分なので断りきれないでこんな恥ずかしい立場で今日ここにきたわけです。だいたいテーマからして「国際化の新段階」ということで、なかなか難しいわけです。相当予測も含まなくてはなりませんが、それらも含めて話の中に織り込んでいきたいと思います。

私の現状を言いますと、食料・農業・農村政策審議会の会長をはじめ、数えてみたら一〇も国の審議会や委員会の座長や委員長をさせられています。そういう立場なので、なかなかこういう公の場でそういう立場からの発言というのは慎まないといけないと

いります。会長のくせにああいう事を言つたと、すぐマスクに田ぬといれまた困るのです。あいつが言つたということだけが広まってしまうと困るのですけれども、今日はかなりの所までいろいろと話すつもりであります。その限りではフリーの立場なのですが、公的な立場がどうもあるのですから、その辺は後で質問いただきましても、わかつていても答えられないことは答えられないと言つておじめにお断りしておきます。

第一点は私の本職は今紹介がありましたように、日本女子大学で教えてます。大学ではお願いして火曜と水曜だけの一ヶ月に限定して、朝から晩まで学生や大学院生に講義やゼミをしております。月・木・金の三日がほとんど国の会議です。特にこの十一月から一月、二月、三月、四月というのは、殆ど講義の日以外はつぶれています。今日は七五さんのお願いなので、断固として来るといふことで可能になりました。

その他に土曜・日曜の二日は何をしつらぬかといふと、私は八年前から全国各地の農民塾の塾長をやつきました。全くのボランティアで、今も続けております。これは私が一番気合を入れてやってくることです。塾に行かないときは直接農村に行って色々調査などをしています。これはおもしろいといふ人物を雑誌や新聞で見たり、もわろん知つてらる人で何か新しいことをやつしてくるといふなことを知るし、土・日は自由ですからすぐに飛行機で飛んでいく、或いは列車に乗つて行くといふことに殆ど費やします。そういう意味で全国津々浦々に、農業をやつしている私の友人がたくさんおり、或いは役場や農協の方など立派な方をいろいろ知つております。なぜかいつのことをやつてきたかといふのは、だんだん後で



「国際化の新基盤と日本農業の戦略」
（第1回セミナー）

申し上げますけれども、学生を教えるのも大事だし国の仕事を大事だけれども、やはり次の時代を本当に担つていく若者達が基本だと思つてしまひました。それが第一の前置きです。

第三番目は、レジュメにこれまであちこちに書いたものを参考資料として付け加えておりますが、たぶん一時間半では全ては話せないだろうと思いまして、資料として入れさせていただきました。英文もあります。別に英文を気取つて出したわけではなくて、新しい基本法が出来た時に世界に向けて発信しなければいけないということで書いたものです。これについては、日本の新しいWTO交渉にあたつて、フレンド国は四〇カ国地域（EUを含める）という国々になりましたが、これが何がしかの役割を果たしたのではないかと思っております。この英文は確かなもので、нейティフが一人掛りで訳してくれまして正確だと思いますので、今日おいでの方が要らないようでしたら息子さんやお孫さんに何かの役に立てていただきたいということです。その他の資料は、今私が充分に話せなかつたがあれば、そこを補つて頂きたいというつもりで載せました。

さて、前置きが長くなりましたが、本論に入つていきたいと思います。私は先程言いましたように、国のいろいろな政策立案の責任者をしているわけですが、そういうことも踏まえながら私の考えていること或いは実践していることを含めて、私の基本スタンスというものを最初に五点に整理して話してみたいと思つています。これもまた国際化時代の新段階における日本の食料・農業・農村戦略の基本だと、私なりに考えていることです。順次この中身を話していきたいと思います。

一、農業は生命総合産業、農村は創造の場

(一) 二十一世紀は食料の時代

私は、第一に農業は生命総合産業であり、農村はそれを創造する場であるという考え方をずっと前から持つてきました。こういふ言葉というか表現はもちろん新しい食料・農業・農村基本法の中にあります。けれども、總則から始まつて条文を読みますと、基本的には私はこういう考え方だらうと考へております。

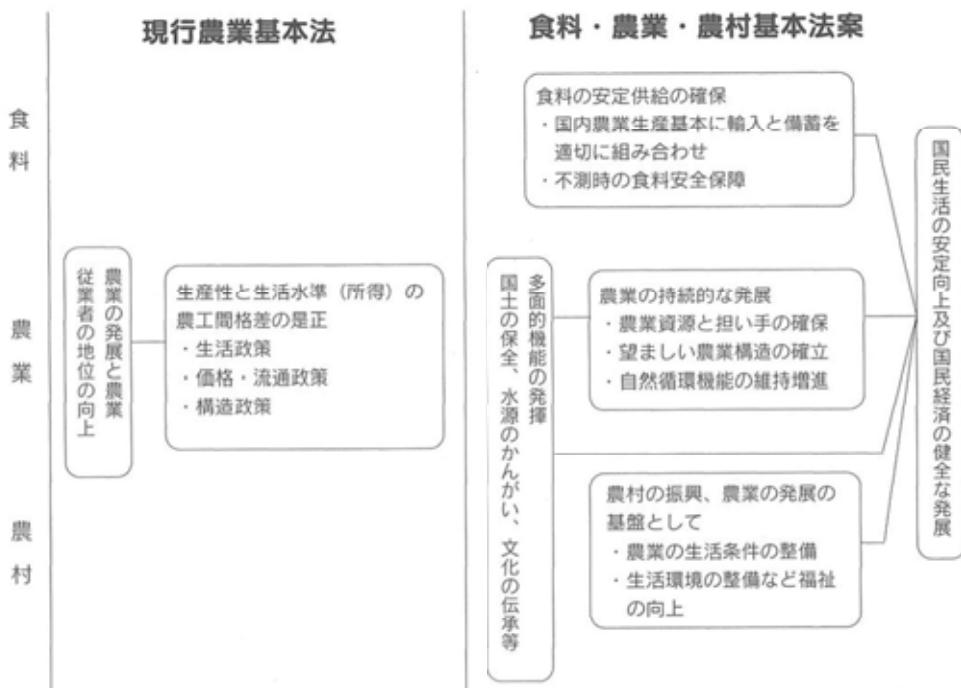
いうまでもなく農業は、食料を生産し供給する。これは本命なのです。その他に基本法で言われているように多面的機能、非常に多面的な機能があります。その他に、例えば来年から完全週五日制になり、小・中学校の学習指導要領が大きく変わります。その中に農業体験・農村体験などの体験学習、或いは総合学習ということが非常に大きく取り入れられることになつてゐます。新しい時代が来ていると私は思います。そういうことを含めて農業の教育力ということは、非常に大きい意味を持つています。人間の生存の為にはプロダクション（production）、生産しなくてはなりません。しかし二十世紀はどうも「メイキング」（making）＝人工的に製造する。象徴的に表現すると「メイキング」の時代だったと考えます。今日は女性の方が出席されていますけれども、メイキャップ（make up）といいます。メイキャップというのは頭の上から化粧品を塗るということなのです。人づくりや扱い手づくりと言

う言葉が農業分野でもよく使われますが、私はこれが大嫌いなのです。これはどうしても「マイク」に聞こえるのです。マイキャップというのはベタベタと外からいろいろ塗つて外見の良さそうな顔を作るということです。ところが私は、二十一世紀は「グローリング」（growing）の時代だと考へています。もちろん全てはそうじきませんがその方向にやつていきたいと考へています。これは自ら成長し、はぐくみ育てるということです。自らの力で伸びていく。「グローリング」というのはそういうものなのです。無理をして、無から有を生ずるような化学的な合成をしたり、鉄鉱石を焼いて鋼を作つたりすること、それももちろん否定はしませんけれども、もっと大事なのはやはり「グローリングの精神」をどう持つていつかというのが、二十一世紀の大きい課題ではなかろうか、方向ではなかろうかと考えています。

そういう意味で、その「グローリング」という言葉に含む中に生命総合産業という意味合いをめでていきたいのです。つまり今までの一次産業、三次産業一辺倒という、特に工業化社会の中で、これは否定は出来ませんけれども、そればかりの方向ではない方向をしっかりと作つていく。そういう意味で農業は生命総合産業なのだ。それを作り上げていこうと思います。

しかし、その生命総合産業をベースにしながら農村がなければだめになる。農村はそれを創造する「場」が必要ですから、「場」をどう造つていくかという意味で非常に総合的なものになりますを得ないというふうに思つています。例えば市町村や農協は、農業農村振興計画を作りますけれども、本当にトータルでそういう

図1 新しい基本法が目指すもの



国民生活の安定向上及び国民经济の健全な発展

これまで考えて作っているのか。誰が何を作るか、何をどういう生産方法でどれだけ作るかということが重点になっているようですが、農村空間をどのように「デザインするか」ということも合わせてやらなければなりません。その辺は真に総合的に考えていかないといけないのです。

ただ、なぜこうすることを最初に強調するかと言いますと、二十一世紀は食料の時代。これは言うまでもないことです。食料の時代であると同時に資源制約の時代。地球的規模で見ればそういうことになると思います。今日、地球人口は六一億人ですけれども、国連の推定で、二〇二五年には八〇億人ということになります。概ねそうなるでしょう。かついろいろな古い国では、日本を含めて高齢化率がかなり進みます。そして、食料と人口という問題が大きく関わってきます。今、FAOの推計によればやはり低栄養水準の人口が八億三千万人、六一億人のうち八億三千万人が低栄養水準人口で、これが一向に減らないという事態が今日まであります。そして、地球上では毎日四万人が餓死しています。由々しい問題です。

さらにその上に資源の制約が非常に大きい問題として関わってくるのではないかと思っています。特に私が一番気にしているのは水資源の問題です。私はつい四日前に中国から帰ってきたのですが、中国では行かない省が三つくらいになりました。チベットと青海省と内モンゴルです。あとはみんな行っていて三〇回くらいは行っているのですが、あの大黄河、あの黄河文明の発祥の地である黄河が、なんと五年前には河口から八〇〇km、洛陽のあたりまで水が流れなくなりました。黄河断流という話は聞いたと思

います。それはいろいろな要因があります。水ということが非常に大きい問題になっています。揚子江の方は大洪水でも、黄河の方は大干ばつでした。干ばつだけではなく、雨が降らなかつたら水が無くなつただけではなく他に要素がたくさんあります。水資源制約の問題は食料生産のみならず生活の上でも環境の上でも大きな問題になるだうと思っています。そこで中国ではいま「退耕還林」政策に全力をあげつつあります。

ちょっと視点を変えて、今日の日本のカロリー自給率は四〇%です。一九〇一年の三月十五日に会長の私が総理大臣に、一九〇〇年に四五%に持つていくといふ食料・農業・農村計画を提出しました。これはみなさんもご存知のとおりです。

この四〇%の実態を言うと、日本は約五〇〇万石弱で食料を作つてゐるわけです。輸入食料を全部足すと、一九〇〇万石の土地で作られた農産物を輸入しているわけです。穀物を中心にしてです。ここまで誰でも言つてゐるのですけれども、食料生産のための日本の水の使用量は推定で五九〇億tです。他方、輸入する穀物を作るのに一四〇億t使われている。推計の数値にはいろいろありますけれども、おおよそ一四〇億tです。つまり日本の半分。日本は稻作のウエイトが非常に高いですから、水の使用量はこうなりますが、海外は畑作物が多いのですが、それでも一四〇億t、くらい使つてゐます。もちろんトウモロコシや小麦は水分一五%くらいで輸入されますから水をどの位使って生産されたかは分かりにくいのですが、作る段階では水なしでトウモロコシが出来る、或いは大豆が出来るはずもありません。これだけの水を使つてゐるわけです。そうしますとこれだけの、なげなしの水を

使って生産された穀物を中心とする農産物が輸入されているということなのです。二十一世紀はおそらく水の時代、食料の時代と一緒に水の時代になると考へています。ですから日本の食料自給率の現状、カロリー自給率の現状の裏にどういう問題があるか、こういうことをやはりしっかりと考へておかなくてはならない。国際化時代の新段階というのはそういう問題まで含めて考へなくてはなりません。

(II) 農業・農村の多面的機能

農業の多面的機能といつて問題を一回立ちあつて、その一番中心は、私は「国土の血液は水である」という考え方を頑なにとつております。国土の血液は水である。水が汚れてくると、どこかでおかしくなつてきている。それから水の量が枯れてくるとこれもどこかでおかしくなつてきている。さきほどの黄河の問題も然りです。黄河の問題では、五年前はなんと八〇〇tの黄河断流は一六二日続いたのです。そのときには空から見ましたけれど、水溜りはあるけれども水は流れていらないのを見ました。今年の五月に足で歩いたのは、日中戦争が始まったと言われる、盧溝橋、マルコボーロが通つた橋です。北京の川の永定河が流れている橋です。そこは川の河床まで降りて見て來ました。五月であるのに自然水がありませんでした。草がみんな枯れています。川岸ではなく河床にある雑草が枯れています。「これはなんだ」と言つて、後でいろいろ調べてもらつたら、「この辺では地下水位は一七mです」と言うのです。上がつてゐるはずもない。草も枯れてしまふ。それは北京で地下水をくみ上げてゐるから。こうしたことが

連鎖反応になつてゐるのだと思います。いずれにしても国土の血液は水であるということを強調したいのです。

なぜこういふことを言つたかといふと、今糖尿病患者が、潜在人口を含めて一五〇〇万ともいわれています。つまり糖尿病にしろ心臓病にしろ生活習慣病、今日、医学がこれだけ進歩した中で病気の殆ど九割方が血液検査でわかるのです。つまり血液が汚れているということは体のどこが悪いか。ガンも殆ど推定が出来る。血液検査で精密検査の前に判る。糖尿は完全に判ります。いわゆる成人病というのは血液検査で判ります。国土の荒んだ状態もわかるのは水であるということはわかっています。しかしこれからの時代、そうだとするならば、そのりっぱな北海道の水を生かした農業をどういうふうにしていくかということも、あらためて後で議論していくだけたらと思っております。そういうわけで、農業農村の多面的機能を一つずつ取り上げるには時間がありませんので省略しますけれども、本当にいろいろな役割を持つてゐるということです。しかし重要なことは、WTO交渉の立ち上げに当たり、我が国は「農業の多面的機能」を第一項目に掲げ主張しているのですが、その多面的機能を国内で実現する実績がなければ全く信用を国際的に失うことになり、海外から痛烈な批判を受けることになります。その点しつかり実践しましょう。

(II) 農業・農村の教育力

それから教育力という問題は、以前から私は関心を持つております。今日はコピーを持ってきましたが、「アフ」(AFF) ました。今日は

とう農林水産省の広報誌できれいな雑誌があります。その巻頭の対談で、武藏野市長の土屋さんと対談をしました。ここはセカンドスクールをもう八年前からやっています。小学校五年生と中学校一年生を全員農村に連れて行って、農村がセカンドスクールというのをやっています。年間一億円をかけなしの財政の中から出しているという所なのです。ここまで早くからやっているのは他の市町村ではまだ知りません。歴史が古いという意味です。子供達を行かせる町村と次々と姉妹都市を結んできたのですが、東京の中央線、吉祥寺の駅前の目抜きの一等地に「麦わら帽子」というアンテナショップまで作りました。自分達の小学生が行く村とお互いに投資してアンテナショップを作つて非常に繁盛しております。そういうことを通じて、ただ食べ物で結ぶだけではなくて、人で結ぶ、心で結ぶ。いろいろな意味での結び方があると思います。先ほど七戸所長さんが「つまり食べるのだけではない、原 料だけではないよ」と話しておられました。人の問題も結び方も、また人も年寄りから子どもまでいる。いろいろな結び方つまり、望ましい循環があつていいはすです。「とうとうふうにして循環を保つて、北海道を日本の重要な拠点にするか」そういう意味で言われたのだろうと思います。その一つの姿が来年以降本当に進めなくてはならない、この総合学習の中の、特に農村・山村・漁村における体験学習。これを通じて子供達に生命の尊さ、或いは農業というのはただ農業ではなく生命総合産業であるということを、身をもつて知らせて覚えさせていくということになるだろうと思います。それが先ほどの、メイキングではなくてグローバルです。先生が「数学はこう、国語はこう」というようなことだ

「新世紀の村づくり塾への5つの提言」

- 第1 農業ほど人材を必要とする産業はない
- 第2 農業は生命総合産業、農村はその創造の場
- 第3 農業の6次産業化で農業・農村に新たな付加価値と就業（雇用）
機会の場の創造を
- 第4 トップ・ダウン型農政（中央集権的画一農政）からボトム・アップ
型農政（地域提案型農政）への転換
- 第5 共益の追求を通じて、私益と公益の極大化をはかろう

けをやってマイキャップするのではなくて、農業・農村に接する中で自分の中から燃え上がるいろいろなものを発見し、自らが伸びていく。それを教育者は育て上げていく。支援してやる。そして新しい方向付けをしてあげるということが必要な時代になってきたのではないかと考えています。

二、農業ほど人材を必要とする産業はない

(一) 100年には若者一五万人

一番目は、私の持論なのですが、農業ほど人材を必要とする産業はない。この100年来ずっとそう考えてきました。これは誰が何か言おうが、私は断固これが基本であると主張してきました。私の信念です。

その100年前になぜ塾ということをやりだしたのかということが、これから国際化時代の農業を考える上で重要なと思うので、若干の余談を含めて話をていきたいと思います。100年前に、二十一世紀初頭には、つまりちょうど今年くらいです。私は20年前にいろいろ計算しまして、日本農業が二十一世紀にしっかりやつていけるためには、最低一五万人の二〇代の若者がいないとダメだ。そう考えました。なぜ一五万人と考えたかというと、農業関係の市町村は、今日でもそうですが3000市町村あります。農業に足を置いている市町村が3000くらいです。そうすると二〇代の若者は一市町村50人、これはもちろん平均の話です。大きい市は100人かもしれないし、小さい村は10人かも

塾活動をすすめる今村 5 原則

- 1、塾生自治
- 2、女性の参加（最低 2 割）
- 3、異業種の参加（最低 2 割）
- 4、地域のシンクタンク（智恵袋）となれ
- 5、本音で語り合う（酒を切らすな）

しれません。平均が五〇人です。また集落は一五万集落と言われています。北海道と内地の諸府県は違いがありますが、ここでは細かい所は抜きにして一五万集落です。つまり平均して一集落に一人は二〇代がいないと二十世紀の日本農業はだめになると考えました。そのためには何をするのかといふと、いろいろな方法があるけれども、結局塾しかなかろう。農民塾をやろうと考えました。その矢先に福島の三春町の青年達がやってきて塾をやりたいと言いました、それじゃあやろうということで始

めたわけです。そのときに農民の子弟だけではダメだとはつきり言いました。「今村五原則」というのがあります。一つは「塾生自治」自己責任の原則をとる。「今村先生がこう言ったから我々はこうやる」というのではなく、本当に自治の精神、一応自治と言いましたが、自己責任の原則ということを徹底して今日までも教えてきています。「町長がやれと言つてきたからやつたら上手くいかないで、町長のばかやろう」とか、「国がけしからん」と言うだけでは進歩がない。「国がけしからんと言う前に、君たちは何を何処までやつたのだ」といつもそういうことを言つたのです。大きい小さいいろいろあります、権力や指導者を犬の遠吠えで批判するのは楽ですが、その批判を聞きながら「おまえたちは何処までやつたのだ。どこまでやってきてここまでやれたけれど、この先は自分たちの力だけではできない。それは国の責任であるというふうな議論だったら俺は受けるけれども」というようなことをいつもやってきました。要するに塾生自治、自己責任の原則です。

一番目には女性を二割以上、出来れば半分を女性にしなさい、それも三春塾をやりだした時、今から足掛け一八年前ですから、この時から女性を入れなくてはだめだ。野郎ばかり集まつては碌な事はない。今日の講演会も、殆どが男性で女性が五、六人でしようか。僕は女性が半分の講演でしたら、無料で二時間でも五時間でもやります。それはそうです。女性の方が運営に伝達力と言いましょうか、P.R.、ロゴミで、とにかく伝わります。後で言いますが農業の六次産業化、あれは本当に女性の力だと思っています。本当にどんどん伝わります。

それから三番目は異業種を必ず一割以上入れる。異業種といつ

ても様々ありますが、役場の職員も農協の職員もいいし、或いは
スーパーの従業員、或いは旅館の息子、女将さん、そういう人た
ちを非常に広く入れるということです。

四番目はシンクタンク、つまり地域の知恵袋になる。名市町村
等で農業農村振興計画を作るわけですが、大体委員は決まってし
まっているわけです。議員、農業委員、農協の役職員、それから
学識経験者といふことで農業を本気でやっている若者が一人いれ
ばいいくらいで、そういうレベルで大体決まります。これで
はどうも紋切り型のものしか出て来ません。そうではない市町村
があることも知っています。違う農協があることも知っています
が、大体は紋切り型です。必ずどこかにモデルがあり、数字が変
わっているか、あるいは作物の重点が違っているくらいで、一言
でいえば金太郎飴です。それではダメだ。自分達塾生グループで
地域の振興計画を作るくらいの力量を持たないと、知恵袋になれ
ということです。シンクタンクは知恵袋といいます。

五番目が酒を切らすなどと言ったのです。これは、屋は幾ら議論
をしていても建前のはどうしても多いのです。これはしようが
ない。これは日本だけではなくどの国に行っても建て前の話が多
いのです。特に東洋、中国を初めとして屋間は建て前の話なので
す。ところが一杯やりだしてとことんやりだすと本音の話にだん
だんなってきます。だから酒を切らすな。六時から初めて八時に
なって酒も切れました。今日は終わり。それではだめだ。本気で
やるのだったら、一時になろうが二時になろうが徹底して議論を
する。それは酒を飲むからという意味ではありませんが、徹底し

て本音で話すところだとやつてきたわけです。

(一) 一市町村平均五〇人、一集落平均一人

私は「じゅうまい」とずつとやつてきたのですが、農民塾を始め
た頃は東大にいましたから、東大には頭のいい先生がたくさんい
まして、「じま粒を蒔くような事をあちこちでやつたって、なん
の役に立つのだ」「日本農業の二十一世紀と言うけれど、どれだ
け役に立つのかな」とずいぶん冷やかされました。私は断固と
して「そうじゃない」ということを言いました。そこで、そう言
う偉い先生方に「今日の日本がこういう豊かな状況にあるのは何
処から始まつたのか」という逆質問をしました。僕を冷笑し、批
判した人も「それは明治維新だ」と殆どの人がいました。「明
治維新は何人があったのだ」人間の指の数ではないか。山口の
萩に行きますと、松下村塾があります。あれは幹部は片手です。そ
れから坂本竜馬の海援隊に至つては片手もいないです。薩摩が
少し多くて両手くらいです。人間の指の数は二〇本。そこから始
めたのです。もちろんいろいろ優れた人材がその他にたくさん
いたのはわかっています。しかし明治維新のトップリーダーはせ
いせいそのくらいです。紆余曲折はあつたけれど路線が良かつた。
時代の流れを踏まえていた。新しい方向を出していった。そういう
ことで明治維新が出来たのではないか。発火点はほんのちょぼ
ちょぼだった。だから「俺もほんのちょぼちょぼかもしれないけ
れど農民塾といふことでやりましょう」。これで広げていくしか
方法がない。もちろんいろいろあるけれども、これと違うやり方
でやつたつていいだろうところなのです。富士山には登り口がた

くさんある。結局目標が同じでも、どの登り口を選択するか、追求するかは各人あつていいはずだ。それその方向をお互いに田指していこうじゃないか。おれはおれなりの考え方でやるというような話でいろいろことをやつたわけです。ただし、そこでも強調したいのは、単に量ではなく問題は質が大事です。質を良くするためには、農民塾をずっとやってきたわけです。一騎当千、つまり、一人で千人力を持たないとダメだといつも考えています。ただ農業技術がいい、ただ経営の技術がいい、それだけではなくて広く視野をもって方向性をしつかり踏まえてやる人材が欲しいという事を肝に銘じて全力を挙げてきたわけです。

そこで昨年三月十五日に出した、二〇一〇年の食料・農業・農村基本計画の付表を見ていただくと必ず出ていますが、二〇一〇年には専業的従事者は一八四万人になると書いてあります。九三万人は六五歳以上。七七万人が四〇歳から六四歳。中堅です。それから一五万人が二〇歳から三九歳。私のかつて予測した二〇代とは一〇歳ほど前で二〇～三九歳ですが、こういう結果が出ております。この一五万人も中身を見ると、男は一〇万、女性が五万、という結果です。つまり私が二〇年前に多分こうなるだろうと推算したのと、量としては同じなのですが、中身は若干ずれています。この一五万人も中身を見ると、三集落に一人ということになります。これは専ら北海道ではなくて、内地の諸府県を念頭に置いた話なので、北海道はまた別の計算をして結構なですが、三集落に若い男子が二人となります。三集落の耕地といふのは大体八〇～九〇㌶です。それを二人でやるということは、一人で四〇～四五㌶をマネージメントしなくてはならない。自分

が耕作するかどうかは別として、平均的に見るとこれをマネジメントしなくてはならない。それだけの能力を持たなくてはならない。ただそれをいろいろな作物や農産物を作る、畜産をどうするか、加工をどうするかとどうするか、水をどうするか、環境をどうするか、さらに生活環境や地域活動をどうするか、それから又都会や生徒達が来た時にはどうじつぶつた教え方をするのか。農業をやっているというのは、或る意味では先生だ。作物の育て方、家畜の育て方を教えながら、寝起きと共に、農家に泊まらせて教えながら、自分の子供時代を思い出し、将来どういう人間になつて欲しいかというようなことを、そりまでやるのが君たちの任務である。任務と言うよりはもう少しきつい、責務であるといふうに、私は少なくともこれまで説いてきました。

そういう意味で、農業だけ、何を作るかという話だけではなく、若者が広い意味でのマネージメントを地域でやらなくてはならない。もちろんお年よりの方、中堅の皆さんもがんばつて貢わなくてはならないけれど、そこは将来を担つていく君たちの時代じやないだろうかといふうに、半分説教し、半分激励といふか、おだてて頑張つていただきとらうことをやつてきました。そのためには相当能力というか自分自身を高める。先ほどのクローリングです。自分で勉強をしなくてはならない。私は塾長だけれど、君たちが伸びる力をいろいろと支援できるが、ああしろじろしろとは一切言わないけれど、じついうふうにそれを伸ばしてやろうかという事は一生懸命努力するという事で、自分で伸びなくてはならない。つまり君たちは、一人ひとりがしつかりとした将来の地域農業と農村を担う人材にならなくてはいけないのだと言つています。

(III) 企画力、情報力、技術力、管理力、組織力 — 五つの要素の総合力 —



人材とはなんだという話なのですが、私はよく五角形を書いて、五つの要素の総合力だといつも言つてきました。企画力・情報力・技術力・管理力・組織力、この五つの要素が基本です。これを総合的に身につけなくてはだめだと言つてきました。一番わかりやすく言いますと、マーケティングに関わることなのです。作るだけが上手ではだめだよ。価値のあるものを作ったとしても、価値を実現できる手段、方法をしっかりと考えておかないといけない。今まで君たちがやってきたのは、作物が出来たら、それからさあ売つて下さい。どう売りましょうか。こういう話でやってきましたが、プロであるためには種を薄く前に売り方、売価、売り場、こういうことをしっかりと組み込んでおかないとだめだ。作物を収穫してからさあ売りましょう、これでは素人でも出来ます。そうではなくて、種を蒔く前にどういうふうに売るのか、そこ所をしつかりやっておかなくてはいけません。

話が後先になりますが、JA甘楽富岡の話になります。このJA甘楽富岡の甘楽塾というのを、一五年前に聞き塾長をやりました。JA甘楽富岡の営農本部長で黒澤賢治さんという方がいます。大変な人物です。彼も甘楽塾に出入りをしていました。正規の塾者より少し年を取っていました。しかし、世の中と言うのは追憶してみますと、黒澤賢治が地域のトップリーダーになるには一五年かかりています。つまり、昭和一桁から上の重石がたくさんいたのです。良い考えを持ち、実践力もあるにも関わらずなかなか

なれなかつたわけです。勿論彼だけではなく、これまでの一般の状況です。しかしその塾生に言つてゐるのは、これからは早いぞ。昭和一桁がどんどん抜けていく時代になつた。これからは五年ぐらいで三〇代半ばでトップリーダーにお前達がならなくてはならないと言つてゐるのです。黒澤さんは情報力、企画力、技術力、管理職、組織力、私の目から見ると九点満点です。全部が九点の五角形が書けます。一つだけがすぐれていてもだめだと思うのです。

そういうことを通して今私が何をやりだしたかといふと、農協の方も含めてのJA・IT研究会を打ち上げたのです。これを全く自主的に作りました。私が代表で、彼が副代表になりました。IT研究会というのは、情報技術のように受け取られますが、本当はJA革命研究会と言つても良いです。これがどんどん広がり出したわけです。第一回の全国大会は農協から70人きました。十一月三十日、十一月一日と新潟県の越後三島といへ、長岡にある農協でやりました。今は農協数は全国で一一〇くらいですか。私は

この研究会に100JAが集まつたら、農協の本当の実質路線が変わっていくだらう、いかざるを得ないだらうと考へています。考えてみればこれも別の意味での農民塾と思つてしています。単協、地域からボトム・アップの精神で変えていかなければなりません。

私は常常、農協の改革ということを考えるとき、金融や共済は、銀行や保険会社もある。JAバンクなどはそれはそれで、しつかり大きいにやつて欲しい。けれど食料を生産し、農産物を売り供給するのを組織的にやれるのは農協しか今の所は出来ない。全国民を相手に他の所では出来ない。それをしつかりやらなくてはだめだといつらうと言つてきています。

私はあちこちで、一昨年までは組合員の農協離れが進んでいたと言つていたのですが、北海道は実態調査をしていないので知りませんが、東北のある著名な元農協の組合長が、今や農協の組合員離れがどんどん進み出したと言うのです。確かにそうです。今や貯金と共に、信用と共に済だけをやつていれば、営農指導などのお金のかかる面倒な文句ばかり言われることをやるよりはいいと考へ方に、多数がだんだんそなりつつあるようです。内地のことです。北海道は違つていたら訂正しますけれども、府県は大体そういう方向になりつつあります。法律だけは農協法の事業の第一項目に営農指導と地域振興計画を作り、司令塔になるということが入つたわけです。一体何をしたらいいのか、どうやっているのかということが大きな問題です。塾といふのはそういう意味では、何も一人ひとりの塾生を育てるだけではなく、地域を動かす。それから明治維新ではありませんが、日本農業を新しい方向に革新の方向に持つていくといふことを私は考へてきたわけです。

そういう意味で、企画力、情報力、技術力、一つ一つを説明は時間がないのでしませんが、管理力、組織力この五つの要素の総合力をつけないと、地域を本当にマネージメントする、自分達の経営もマネージメントできないだらうといふに考へてきたわけです。

三、食と農の距離を全力を擧げて縮める

(一) 食生活構造、消費生活構造の変貌

三番目に近年食と農の距離が拡大したというのが、平成十二年、

今年の食料・農業・農村白書の最大のキーワードなのです。じ存知の方が多いと思います。

私はもちろん白書づくりの責任者をしていますから、そこをはつきり書けということを言いました。食と農の距離が拡大したということは、これもさきほどの七〇所長の話と関わるのですが、農産物の中身も立派な生鮮農産物を供給するというシステムでやってきたわけですが、何と云つてもそれを買う奥さん方が料理をしなくなつた。つまり外食や中食が増えて内食が非常に減つてきました。けれども流通や販売は専ら内食ばかりを考えながら、重点に置きながらやつてきた。家庭内食、家庭内で調理をするということを意識してやつてきたわけです。しかし現実は中食、つまり加工済み、調理済み食品、加工や外食という分野が非常に増えてきた。これのウェイトが高くなつていい。これに対応した農産物の供給システムとのミスマッチが大きくなつてきた。非常におろそかになつていた。農家・農協に対して、外食がこういうものが欲しいと希望してもなかなか来ない。中食、食品加工会社に来ない。例の中国のネギ、しいたけに象徴されるようなことが起こつてきたわけです。

こういう事態が進むと共に、今度は別の面から見ておきたい。消費者が、食料品（外食など全て含めて）に対して支出している金額の総額は約八〇兆円です。そのうち水産物を除いて農業が受け取つているのは一六%なのです。これは四、五年前の推定数字ですから、もつと今日は下がつているかもしません。要するにもつとわかりやすく言うと、消費者が一〇〇円玉を出して食料品を買った時に農業が受け取るのは一六円しかないという状態になつてゐます。それでは残りの八四円がどうなつてゐるのかとい

うじ、二次産業の加工食品製造業や、卸・小売りの流通や運輸など三次産業は外食産業も含めて山ほどありますから、皆付加価値をつけ雇用を増やしてやつてきているわけです。もちろん原料の内容によりますが、ともかく消費者が出しているのは八〇兆円に間違ひありません。八〇兆四〇〇〇億円といつ巨額なもの支出しているわけです。しかし、農業の取り分は少ないのです。どんどんウェイトが下がつてきており、高くなつてゐるのは、中食・外食に移行している。

(1) 食生活指針、健康長寿世界一の危機

ですから消費者の一部は顔が見える食料品が大事だと良く言いますが、加工された食品はほとんど顔が見えない。中身がどうなつているのかわからない。ネギだって、曲がつていても白くても、そんなことは刻みネギの段階ではわからなくなつてしまつてすから輸入された中国産のネギ、これはネギ一本では食べるはずはないわけです。極端に言えばラーメンをすりながら、あるいは蕎麦をすりながら、このネギはどうから来たかということを考える人はいやしないのです。そういうことで、ますます食と農の距離が遠くなつてきました。吟味して食材を買って作る内食と、中食・外食との間が万里の長城みたいな話です。これをどういふうに縮めるかという課題が最大の問題です。

これは食べものの話ですが、他方で先ほど言った、これは都市と農村、象徴的に言えばその小学生が何も農村のことを知らないなつてきた。それは農作物や家畜など縦を書かせればわか

ります。事実私は日本女子大の先生をしていましたから、付属中学・高校で毎年一回、特別講義と言つて、付属中学・高校生に講義に行くのです。その時は難しい話をわかりやすく言う努力をしますが、一番手っ取り早いのが講義を始める前に「今朝食べたもの絵を書いてくれ」と紙を配るのです。そうするといろいろ出てきました。そういうことをかなり広くかつてやつたのは、女子栄養大学の足立巳幸先生という女性の教授ですが、彼女からいろいろ聞いていたので、付属中学の生徒に自宅で食べた朝食の絵を書かせました。すると白紙で出でるのが三分の一なのです。つまり今朝は自宅で食べていないということなのです。おにぎりだけ「ロツ」と書いてきたのもあります。比較的まともなのは、目玉焼きとパンがある。テレビまで書いてあるのです。テレビとコップを書いてあるので、「これはなんだ」と言つたら、「テレビを見ながら牛乳を飲んできただけです」。皆さん、これを一度やってみてください。どこか小学校でもいいです。札幌じゃなくても、農村でもいいです。来年の三月にもう一度行つて、今はBSIEが問題になつていますから、牛の絵を書いてみてほしいとかをやってみようと思つています。キャベツやダイコンがどう生えているか「君たちが知つてゐる作物、或いは家畜の絵を書いてくれ」と言つて、どういうものが出てくるか実は悲しい事なのですが、一面では楽しみなのです。そういう意味で都市の生徒は農業と農村を本当に知らないなつたのです。

食べ物をコンビニで買うので、コンビニを作つてゐるわけはないから、朝の御飯、例えばおにぎりは会社の人作つた、こういふうに書く子がかなり圧倒的に多いのではないかと思います。

私はこっちのほうが心配です。この拡大した距離をどう縮めるか、これがやはり大事なことで、農業の六次産業化と言つてきたのは、そういう背景があるわけです。

(II) 農業の六次産業化の政策的意義

中食・外食の原材料や半加工品には輸入の食材が一段と増加していると思います。今、セーフガードの話が中国との間にあります。輸入の農産物やその加工品が、おそらく非常に増えてくるだろ。もう増えてきていますけれど。加工は中国やさらにベトナムに行つているようです。それを今全国で調査しているわけです。缶詰や冷凍食品になると、検疫、品質検査も事前にちゃんとやつていますという事になると殆ど自動的に輸入されます。この頃多いのは冷凍食品で、サトイモを同じ大きさにみんな剥いてゆでて冷凍したのがあるでしょう。皆さんも中国に行つたら、ネギ・じいたけの現場を見るのもいいけれど、サトイモをピンポン球の小さいようにきれいに剥いて冷凍してあるのが、じこのコンビニやスーパーでも売つていますけれど、それを作つてらるといろに是非行つてみてください。何百人と並んで作業をしてゐるのです。穴の中をトントンと殆ど同じ大きさで通つてきます。規格品です。こういう大変な手作業をするわけですから。場所によつて、熟練によつて少しつつ違いますが、賃金が今のレートで日本の二〇分の一ですからそれは労働集約的にやつた方が運かにいいということで、様々な手のかかる加工食品の輸入が進みだす可能性が大きい。ますますこの間の距離が拡大していきます。これをどうふうに書くかと、私がいろいろ考へたのが六

次産業なのです。初めて世に問うたのは今から八年前です。最初は一十一十三＝六と考えていたのですが、この足し算ではだめだと五年前に修正しまして、掛け算が良いとなりました。掛け算はなぜ良いか二つ理由があります。〇×一×三は何度かけても〇なのです。つまり一次産業、農業がなくなつたらおしまいだということを強調したかったのです。もう一つは掛け算をすることによつて、有機的な結合を常に持たなくてはならない。食品の原料を生産する農業、それを加工する二次産業、そして確実に消費者に届ける三次産業というわけです。これはどちらが主導権を持つか。私は可能な限り一次産業が主導権を持ちながり、六次産業化をやっていきたい。そういう意味で掛け算を考えたわけです。

(四) ベティの法則

農業の六次産業化ということは決して單なる思いつきで言い始めたわけではなくて、ベティの法則というのをベースに考えたものです。ベティの法則とは「一・二・三・四・五・六」がかつて提起しておりまして、これは経験法則ですがその要は三つあります。彼が言つているのは、第一に先進国になるに従つて、就業者の割合が一次から二次、三次にだんだん移動していく。三次産業のウェイトが非常に高いのは先進国なのです。

第二に国民所得のウェイトも同じように一次、二次、三次と先進国になるほど高くなります。ですから日本は今は三次産業が圧倒的にウエイトが高い。アメリカなどもそうです。

三番目は一次と二次、三次の間に所得格差が非常に大きくなつてしまつています。この三つがベティの法則の中

身なのですが、経験法則で世界の何十カ国とデーターのある国を調べて出していった。これがベティの法則です。

コーリン・クラークはオーストラリアの學者です。一九四〇年ころに最初にこの法則を出しました。このベティといふのは、経済学の宗祖である、ウイリアム・ベティ。このベティといふのは、絶対主義のアダム・スミスより學説史的に前の方ですが、統計を非常に重視しながら「政治算術」といつたような経済学の論文をかかれた方です。そのベティを尊敬して、ベティの法則といふのを「コーリン・クラーク」が作った。これを借りて、どうより逆手にとつて農業の現実に少しキャッチフレーズ化して、何か上手い表現はいかどうかと、農業の六次産業化といふことにしたわけです。

(五) 女性の起業家

農家の奥さん方は、家にいれば田舎に命令されるばかりでうだつがあがらない。だから外に出て、自分のふところが暖かくなるようにするにはどうしたら良いかという事で、六次産業を自分達で始めるのが各地でどんどん増えてきました。それが女性起業と言われるものです。最新のデーターは入手していませんが、今は全国で七〇〇〇ほどあります。七〇〇〇と云ふのはたいしたもので。各市町村に平均して二つか三つあるようなものです。たしかに味噌もくそも一緒の所もあります。つぶれたものもあるし左前になつた所があるのもわかっています。しかしその勢いたるや、今、農業関係の統計で右肩上がりのデーターは女性起業の統計だけと言つても良いほどです。

これには現代的に考えていろいろ意味があります。女性起業を



始めた農村の女性の皆さん方が持つておられる素晴らしい感性、しっかりと加工して、安心・安全なものを都市のみなさん、仕事を持つておられる、社会活動をやっている都市の女性の皆さんに、なかなか家庭料理が出来ないという方々に供給しましようという、崇高な考え方から、加工して付加価値をつけて儲けましょうというのから、直売で地域の目玉にしようという様々な考え方があつていいと思います。私はどれ一つとして否定はしません。大いにやつていたいきたいということで奨励をしているのです。ただ、考えなくてはならないことは、この女性起業の皆さん方が頑張ることによって、地域の雇用というよりも就業の場と言つた方がいいでしょうか、特に高齢者、或いは定年退職をしたような方、高齢者が増えてくるわけですから、六〇歳、六五歳以上はどんどん増えていきます。こういう人々を近代企業で再雇用するのは殆ど不可能なのです。農業分野しかありません。しかし本来の農業はそう簡単に出来ない。しかし加工や賣ることが好きな人、得意な人はたくさんいますから、そこに新しい就業の場をつくる。と同時に他方では、年寄りにただ闇雲に働けというのはだめなのです。やはり、懐が温まる仕事を作り出さない限り、お年寄りでも誰も熱意を燃やすまいのです。これはしょうがないことです。人間社会としてはしょうがない事です。

事例に取り上げた甘樂富岡地域も定年退職だと、定年だけではありませんが、この地域には一々先端産業が集積していました。それがどんどん中国へ行つたり、様々に海外に立地をして従業員を減らしていっつているのです。人工衛星を打ち上げる基本部分を、甘樂富岡にある工場が作っていたのです。それから血圧計の心臓

部もこの甘楽富岡地域にある工場が作っていたのですが、それが全部リストラになつていきました。しかしそういうリストラになつた人たちを、実に巧みにこの黒澤賢治さんが組織化するわけです。もちろん北海道とは比較になりませんけれど、例えば彼は明快な路線を打ち出すのです。四〇%の土地がない人には調達しましょ。野菜作を四回転させなさい。四作といいますが、必ず売上として四〇〇万円で売れるようにします。もちろんハウスは農協のリースで、この四〇%の中のどれだけをハウスにするか、そういうことをマネージメントするわけです。これは基本なのです。基本バーチンだ。北海道では、「そんな馬鹿な。もっと大規模でなければ」と言いかしれませんけれども、北海道にも中山間や条件が悪い地帯もあるわけです。考え方だけはしっかりと取り入れ、数字を変えていけば良いわけです。幾らでも雇用をきめます。考え方なのです。問題はきちんとマーケティング戦略を立て生産者の所得を上げていくのです。加工その他をやれば雇用も増える。皆懐が暖まって、働き甲斐のある場を作ります。

小泉内閣が構造改革をする、リストラも進むと言つた時に、どうして農業会のトップリーダを任じている方々は「農業がリストラ組みの優れた部分は引き受けた時代が来た」と、向こうを張つて言わなかつたのか。そのくらいは農業県の県知事もやるべきだったのです。この県へ行って聞いてもやっていません。北海道はどうですか？ 聞いていないですね。もしあつたら後で教えてください。この知事も言つていらないようです。それではダメなのです。構造改革の中味は、生産性の低い産業部門を、それは工業だけではありません。一次産業、三次産業も低生産部門を切り

捨てつつ変えたいのです。その中には言葉では言つていませんが農業もそうです。しかし、大事なことはこれから農業こそ新しい生命総合産業に作り変える。すじい付加価値をつけさせるような農業を地域でどう作っていくか。それは農業というものを、過去の概念で考えるからおかしくなるわけで、これから新しい時代の農業の概念を皆さんで作り変えていかなくてはならない。六次産業も農業の中に入れていくことが大事なのです。

市町村のいろいろな計画を、時に私は行ったときに見せていたのですが、農業はただ土の上で作る。ただ家畜を飼つてやる。それが農業だとみんなが書いているのです。それだけではなくもう少し立体的にトータルに考えなければだめだということを、計画の中に書いていないのです。自分達が作ったものを、例えばちゃんと加えて道路端の直売所で売る。学童の体験学習を受け入れる。それも農業の一環である。新しい時代の新しい農業のイメージづくりを地域の皆さんがやっていかないと、だめだろうと思うのです。そこまでやらないと先程七戸所長が言った、循環型の農業、農村社会の新しい構造というのは作り出せないと私は考えています。

四、トップダウンからボトムアップ農政へ

(一) 地域提案型創造的農政の推進

私は食料・農業・農村政策審議会の会長になる前に農政審議会の会長をやつていて、新しい基本法策定の委員ではありませんで

したが、かなりその委員達を集めては叱咤激励し、意見を述べてきました。農政の望ましいあり方は食料・農業・農村という三段重ねでやるという話から、生命総合産業、法律では生命総合産業とは書けませんが、私が考えたのはそういう意味だということないと合わせて、トップダウン農政つまり中央集権的の一農政を徹底的に改めないとダメだ。地域創造型、地域提案型創造的農政。これに徹底的に変えていこうじゃないかと主張してきました。もちろん経営所得安定政策とか、条件不利地域への直接支払い政策などというのは、全国画一的にやらないことはないことくらいわかっています。特に今までの農政の中心だった補助金農政を徹底して変えなくてはならない。一切陳情農政はやめろということです、地域から提案してこないのにお金を付けるなどいうことで、この四月から地域提案を受け付けるなどいうことです。ですが設けたことはご存知のとおりです。

そういう地域から提案されて来たようなものに対して、農水省の皆さんには本当に知恵を出していたいと思つてゐるわけです。私の本心は農水省の三分の一の職員は、農村に行つてゐる。どこの村に行つてゐる。市町村の役場へ行つてゐる。私はこの姿が一番望ましいと想ひます。三分の一は常にいないというローテーション。補助金の書類審査のようなことはやらないでもいいじゃないか。一ト革命時代、いろいろな情報はどうへ行つてもわかる。もっと大事なのは、地域で皆さん何をやろうとしているか、若者はどうか、年寄りはどうか、女性はどうか。どこが一番大事なのかをわかる為には、三分の一の職員が、霞ヶ関からいなくなる。これが一番望ましい。君たちは本当に国会も大変だ。先

生方への説明などをするのも大変だけれども、本当は農村に行つて、それもただ農業生産をどうするか農業の仕組みをどうするかだけではなく、農村の役割というのはどういうふうにあるべきか、トータルで考えていただきたいということを言つてきましたのです。一言でいえば総力を挙げて知恵を絞る、そういうことです。

(II) 市場原理の活用—構造政策型の所得政策へ—

地域提案型の創造的農政というのをやるには、よっぽど知恵がいるわけです。農民塾で教えてきた連中はだんだん今力を發揮しつつあります。少なくとも私の薰陶を受けたのは、全国で一万五千人います。一五万人作ろうと思ったのですが、一八年かかつたったその一割なのです。相当努力したのですが。もちろん全部が塾生ではありません。いろいろな機会に会つて私の話を聞いた人は、一万五千人はいます。いるつもりなのです。ですからどこへ行つても「やあやあ」という話で、後は簡単です。私は一瓶を一本下げて「久しぶりに来た。今晩は飲みながら話そう」と、ワーッと話をして新しい方向を出していかないとダメだと思つています。そういう中から革新的な農政を各地から提起してしかるべきであると考えています。

当然、農業も産業である以上市場原理を前提にしなくてはなりません。消費者ニーズに本当に的確に対応するためには、市場原理を適用するしかないのです。と同時にその裏腹としては、経営所得安定対策が必要だということは痛切にわかつております。しかし、それは從来の米価政策に見られるような構造政策に中立的なと言いましょうか、あるいはそれを避けようのような所得安定対

策ではだめで、産業として自立しつる構造政策型の経営所得安定政策を考えていかなくてはならない」と考へています。

五、共益の追求を通じて私益と公益の極大化をめざす

(一) 市場原理とは何か

この問題をさらに理論的にイメージすれば、共益の追求を通じて私益と公益の極大化をめざすということです。これは日本だけではなく、中国でもそういうことをきりに言って回ってきました。私益、公益の関係を言いますと、皆さんはアダム・スミスの「國富論」は読んだことはあるでしょう。その中には、今の経済学の教科書のようなことは何も書いてありません。面白いことがたくさん書いてあります。一種エピソードも。そこにはこういう一節があります。「肉屋は肉屋らしく、パン屋はパン屋らしく、酒屋は酒屋らしく、一生懸命自分の商品を作り売る」ということに努力する。こうしてみんなが競争することによって、国富、つまり公益です、國富は益々増えていく。それが国民を富ます道である」つまりその裏には分業ということを言っているわけです。今言った、パン屋はパン屋なりに努力して、酒屋は酒屋なりに努力するというだけがありますが、要するに市場原理を言っているわけです。その前の絶対王政時代とはまるつきり違います。王政時代は殿様が命令すれば、皆それに従う中央集権的画一政策ですが、それは一八〇度違う、比喩的に言えば皆が分業の中で競争し、

それで努力し汗水たらすことが結果として公益に繋がる。つまり國富を極大にする。ですから、私益公益の関係はスミスの言つているとおりです。市場原理の解説は、最近の教科書を見ても基本的に進歩はないのです。少し修飾語や言い方が変わつただけで、皆スミスと同じ事を言つているのです。國富論そのままなのです。

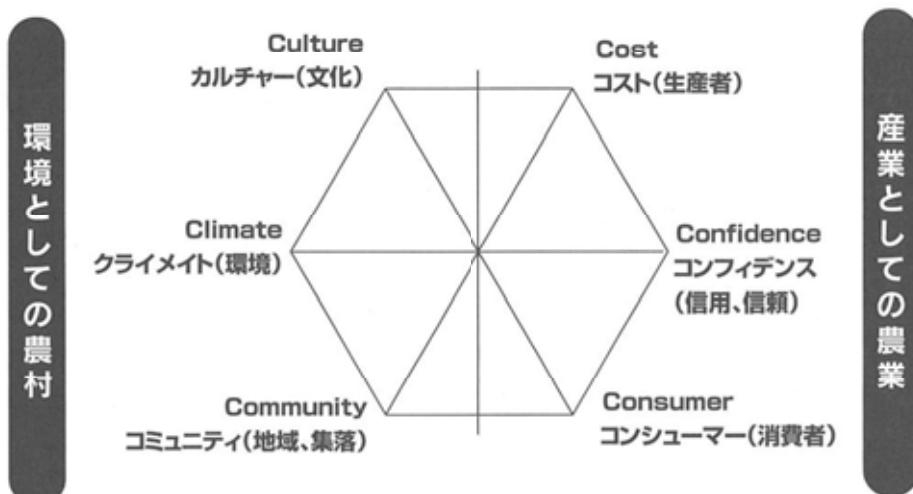
(二) 新しい時代における共生の追求の道

しかし問題は、日本の農業を歴史的に考えると、共益の追求をずっと歴史的にやつてきました。北海道は少し違う所がありますが、特に日本農業、内地諸府県をよく考えますと、水利権、水利をしつかりやらないと稻作は出来ませんから、皆水源の維持管理から、水利施設、分水に至るまで維持管理をきちんとやつてきました。昔の話ですが、ここの大正用水だつて調べたことがあります。ですが、一生懸命やつてきました。しかし、だんだん過疎化、高齢化の中で変わつきました。どうひうシステムで維持管理にするか、どう問題が出てきております。それから入会権、漁業権もです。日本の生産、つまりフローに活かして非常に優れた特色だと思います。資源循環の基本命題を内包しています。資源を食いつぶさないで、上手く使っていく。これを現代的にはサステナブルと言います。

(三) サステナブルアグリカルチュラルディベロップメント

持続可能な農業、サステナブルアグリカルチカラルディベロップメント、私は一〇年程前の第二一一回国際農業経済学会議の総責

図2 農業・農村の基本的価値と多面的機能（C … S I X 農村。農村）



任者をしましたけれど、「サステナブルアグリカルチャーディベロブメント」これが基本テーマでした。サステナブルという言葉を大会テーマに上げたのは、他の分野の人は驚いたはずなのです。各代表と協議して、サステナブルということを日本で初めて「ぶち上げたと自負はしているのですが、これからはやりだしたのです。サステナブルディベロブメントという、持続可能な開発などと適当に他の分野でも使われるようになつていくわけです。要するに日本農業はもともとサステナブルなことをやつてきた。その一つの手段が、仕組みが水利権であつたり入会権であつたり、漁業権であつたりしたわけです。

例えばタイとかインドネシアでマングローブを切つて、エビの養殖をやつて日本に輸出した。それが七、八年でだめになつてつぶれていくわけです。病気は出でくる、だめだと。今、そういう国々から東京水産大学に漁業権の研究に来るのが非常に増えています。つまり共益を追求しなければならない。サステナブルではなくてはならない。そういう考え方方が芽生えてきているのだろうと思います。そういう歴史があります。

さらにヨーロッパに目を転じると、イギリスを始めEU諸国の中に、経済学の理論としてコモンズの思想とか哲学がだんだん経済学の分野に入って来つつあります。コモンズの理論を私なりに表現すれば、共益の思想なのです。そういう意味では、なんだ今ごろ言い出したのかと私などは思つてゐるのですが、やはりサステナブル、地域の資源を維持管理しながらかつそれを適切に利活用しながら生産も上げ、それはただ農業生産だけでなく環境保全や国土保全も、都市農村交流などの新しい時代のあり方も考え

ながら、共益を追求する。それは地域がベースだけれども、都市と農村との関係を新しく結びながら、ということまで含めると国民的な課題になつていくわけです。農業は都市の人は何も知らない関係ない。ただ物さえ食料さえ来ればいい。こういう人々が多くなつた。農業者は今日、国民全体の中で圧倒的少数派ですから。生命総合産業という新しい概念をきちんと提示して、非農業の多数派に持ちかけていかないと支援してくれない。少数派は切り捨てればいいという発想に繋がりますから、そつあつてはならないと

いうことです。やはり共益の追求を徹底しながら、ただ狭い意味での自分達での地域を守るというふうなことだけではありません。共益とはもっと広い思想を持つてゐる。もつと言うならば、外国人に理解してもらひにはコモンズの考え方、哲学・思想というふうに表現しようと思つてゐます。

それはさておき、共益の追求通じてどのように私益と公益の極大化を図るかということが大事だと思います。これから時代、共益の追求の手段、方法をしつかり確立するためには、農協の徹底的改革、特に営農指導と販売戦略の革新、そして集落営農の法人化、さらに農業経営の法人化の路線の推進が必要だと考えています。それと合わせて農村空間の基本構造を見直したいのです。産業の基盤としての土地利用空間、端的に言えば農業のあり方です。しかし産業も農業だけではありません。六次産業ですからいろいろな分野があります。そのためにも土地利用空間をしっかりと作り上げる。定住性をうながす居住空間。居住空間がだめになついたらどうしようもありません。アクセス可能な自然空間。今日は特に市町村の担当者の方がたくさん来られて

ますので、この三つの観点から新しい地域のプランニング、新しい時代のしっかりしたプランニングを作つていただきたいと思うわけです。

II 農業国際化の新段階

一、農業の国際化

(一) 共同研究・国際交流

ついでながら言ひますと、今五年計画で三年目が終わろうとしているのですが、カナダと日本で共同研究をやつていて、ピーター・エビティールといつて、私の友人なのですが、カナダ農村復興財團の理事長です。以前OECDのカナダ代表委員までやっており大変な学識があります。アルバータ大学の名誉教授で私と同じ年くらいです。昔から知つていて、日本に四五年前に来てこううことを言い出して、そこから始まりました。カナダはナフタ（北美自由貿易協定）が出来て、アメリカ筋の多国籍企業の資本が入りだして、特に中西部のアルバータ州などは平坦地帯で小麦などの耕作地帯ですが、そこでどんどん規模を拡大していきました。しかし一方でどんどん集落、コミュニティが崩壊していく。つぶされていっていいるというのです。彼はスライドから何からたくさん持ってきて見せるわけです。日用品を買うのに片道六〇km、道がいいので二時間あれば買ひに行けるのだけれども、そういう所が人間の住む社会かな

というのが問題提起なのです。

ところが、私が日本のあちこちの村へ行ってみるように紹介しましたら、一番びっくりしたのは農村の女性の目が輝いているのが驚きだったと言うのです。年寄りもそうです。皆、日々いろいろな活動を楽しんでいる。生き生きとした目だというわけです。しかし日本の農業は大変で、零細で、カナダの大規模経営から見れば本当に自家菜園のようなものが農業をやっている。構造問題が大変だというのはわかる。だから、環境と構造改革との関わりも良くわかるけれども、しかし農村や集落、人間の定住する場所については、カナダがいいのか日本がいいのかというのは、色々と考えなければならない。そこで共同研究しようと言うことになりました。

結論からいふと二力町村指定しまして、福島県の飯館村。福島でも一番北の畜産の村です。栃木県の粟野町。ここは女性起業で花を作つたり、いろいろなことをやつしている活発な所です。この二力町村を選びまして、カナダはアルバータとケベックの一力村を選びました。そして若い大学院生を呼んで、一日一日ではなく一週間、一〇日くらい泊り込んできちんと調査、つまり定点観測をする。毎年です。一、二の事例ではなくて相当広く調査をしつかりして、面接調査まで含めてやる。そしてその分析結果を各國政府に出そうじゃないか。そしてさらにその先は国連FAOに報告書を出そうじゃないか。二十一世紀の農業と農村像はこうあるべきだという提言をやろうというのが、彼の提案なのです。私も受けてたって共同研究始めた次第です。そのうえカナダの農業大臣が一月頃に来て、一晩本当にじっくり懇談したいと言うので

す。カナダは日本のフレンド国ではないのです。ケアンズグループの総大将ですから、そこの農業大臣が来るというので、しめしめと思っているのですが、他面でWTO交渉についていろいろ言われるかもしません。

私も可能な限り、日本という対立する立場の国々、例えばオーストラリアの大蔵官の農業担当トップの参事官兼領事のボブ・コールダーと仲よくして議論をたたかわせています。国際的な話に戻しますと、アメリカにしろオーストラリア大使館にしろ、彼らは日本の代表的な農村はしっかりと視察や調査をしています。日本が多面的機能ということをWTOで第一に主張しましたが、日本はかつてないことは言うけれども、環境調和的あるいは持続的な農業を本当にやっているか。多面的機能を本当に実現するような努力をしているかということを調べているのです。口では言うけど、何もやっていないのじゃないのということを調べているのです。WTOのこれから交渉の中で、日本はかつてないことは言うけれど、実際に農村に行つてみると違うことをやつているじゃないか。これが日本の交渉の上では一番の打撃になります。会長としていつも言っていますが、日本は主張する以上はその裏づけを、本当にこじまやつていてることを証明しなければならない。それじゃないと世界の各国は納得しない。これが交渉の最大の問題だと言うわけです。それは前のウルグアイラウンド交渉の時もかつてないことを言つたけれども、「なんだ」という事は皆わかっています。足元を調べているわけです。彼らはあらを探すというのではなくて、日本政府は口で言うことと実際に現場でやつていることが違つて居るのではないか調べているのです。

これが大きな政策課題になるだらうじふれいとを含めて、新しい時代における日本の各地域、都市と農村との間だけではなく、地球上の共生の道をしつかりと考えなくてはならないと私は本当に考えています。

(II) WTO交渉の進展・日本の提案

話題をWTOその他に持つておきます。七三〇先生から頂いたのが、「国際化の新段階」ということだ、どうしてもWTOのことと言わなくてはなりませんが、しかしWTOにかかる情報は本当に欲しかったたらたくさん情報や資料がすでに色々と出ています。ちょうど一年が経ちますが、シアトルの闘争会議がNGO・NPOでつながれて、闘争会議が成立しなくて、つらこの間十一月の九日から十四日ですか、カタールのドーハで闘争会議がありました。正式出発したのですが、農業交渉だけはその前もずっと続けられておりました。結論から言えばドーハーの闘争会議で日本の主張はほぼ入れられたということは先刻ご承知のことだと思います。念のために言いますと、日本提案の骨格は「多様な農業の共存」という基本哲学の基に五つ提案しました。農業の多面的機能への配慮。一番目は食料安全保障の確保。二番目は農産物輸出国と輸入国に適応されるルールの不均衡の是正。三番目は開発途上国への配慮。五番目は消費者・市民社会の関心への配慮という五点を言いました。

日本の、特に多面的機能についてのフレンド国は増えて四〇か国地域になつてしまひました。ひとつを初め韓国など、いろいろ力強い支援を頂いています。自画自賛をするわけではないですが

ど、ここに参考資料として掲げた英文は本文の三分の一くらいの部分しか出していないませんが、この「JIOOK Japan」もすいぶん役に立つたなと今になって思っています。これを出してすぐ、特にアジアの国々が外務省を通じて、この文章を転載していか、引用していくとかとすいぶん來ました。いろいろな所で関心を持たれていたのだなと思います。そういう意味で多面的機能については四〇カ国地域が日本に賛成している。しかし全体から見ればまだ少ない。一四四ヶ国。オブザーバーが一十いくつありますが、それらの国々とやつていかなくてはなりません。最終的には、先進諸国の強力なアメリカとEU、それからケアンズグループ、それと日本といづつかのフレンド国などの、四極構造くらいになりますのでしようが、その中でやつていかなくてはなりません。

日本が主張してしまった、非貿易的関心事項に配慮すべきとうようなこと、あるいは農業交渉だけを取り上げるのではなくて一括して交渉しなくてはならないというようなことなどを含めて、日本の主張がほとんどが闘争会議では認められたということが特徴だろうと思います。

今度はラウンド、ウルグアイラウンドじふの言い方を変えるらしい。「ラウンドじふのは丸テーブルで交渉する。先進国だけ、強い国だけがテーブルに座つてやるのはおかしい」ということが、途上国から出て正式にはじむなるかわかりませんが、作業工程といふものなじむことを進められるようになります。

一、食の国際化と食の安全性

もう一つは、食の国際化と食の安全性じふの問題が、非常に大

きい問題になつてきています。口蹄疫、BSE、それから遺伝子組換え食品の問題などがあります。遺伝子組換え作物の栽培に関する問題、これはBSEに勝るとも劣らない大きい問題だと思っています。さうにそその食品問題が入つてきます。そうじゃなくともどうもろこしや小麦、大豆は、スターリンクを始めたくさん問題がありますから。そういうことをどう考えていくか。いずれにしても安全性を確保するための法律を作らなければならぬ。

食料安全保障と危機管理システム。これも来年の三月までには危機管理システムを日本で作ります。日本は食料安全保障のことをWTOに提起する上では、日本の食料安全保障にかかる危機管理はどうなつてゐるのかと必ず出て来ます。これは相当いろいろな意見があることはわかつてゐますが、システムだけはしっかりと作つておかなければならぬということで、今鋭意にやひせています。

三、多国籍企業をめぐる諸問題

(一) 貿易問題

次に、多国籍企業をめぐる問題というのが、これから一番難しい問題になると思います。つまりWTOというのは、貿易の自由化その他は国対国の関係なのです。だから出口入り口をどう抑えるか。水際をどう抑えるかという話ですが、非常に難しいのが多国籍企業の問題です。言つまでもなく、資本と商品の自由化とい

うのは、輸出入はどんどん促進させましょう。これが自由化の話です。

ところが農業というのは、農地が要ります。水が要ります。労働力が要ります。それから資本が要ります。技術、資本、ノウハウも含めて。農地や水はそれぞれの国にとつての地域資源ですから、移転不可能。輸出入はできないものなのです。もちろん労働力は自由に移転出来そうなのですが、国対国家間では、簡単に輸出入は出来ません。日本は法務省、入管ががつちり抑えて、不法入国を取り締まる。不法入国や不法滞在は非常に厳しく取り締まる。これは門戸を開けそんにありません。研修生という名のいく限られた人を、農業の分野でも入れていています。外国人が増えてくるのをいつたいどうするかという問題に、今直面しています。この労働力については、例えば中国だと賃金が日本の一〇分の一くらいです。平均してです。今日の為替レートを前提にして一〇分の一～三〇分の一くらいの間ですから。土地と水はもちろん移転不可能です。労働力も事実上移転不可能です。この土地・水・労働力を使って、資本はちょっと置いたとして、これで出来た商品だけは国の中でも動させましょう。農産物の貿易自由化問題の難しさです。この難しさがあるのです。

(II) 日本・中国間のセーフガード発動問題

今は、ネギとか生じたけのセーフガードの問題があります。セーフガードをどうするかというのは、皆さんも新聞をいろいろ読んでいてご存知でしょう。ここからが難しいのです。抽象的に資本といいましたが、これは商社の系列、孫下請け、ひ

孫下請けのようなものです。それで中國で生産されたものを持つてきて、資本系列でスーパーとか食品企業に行っているわけです。

ネギ、じいたけだけではありませんから、他のものも同様です。それで卸売市場は通らないという國です。中國側のその筋の専門家

を私は知っていますが、彼らの主張は日本の資本系列の企業が勝手に来て、種を持ってきて、技術者を連れて来て、日本優位の合弁を組んで、中国人が一般的にはほとんど食べないネギや生しいたけを作らせて、規格に合わせる。半分ぐらいは規格に合わないから捨てている。ネギの尻尾を切る、葉っぱを切る。要するに、貴重な水や農地を使って生産し「ゴミ」を捨てている。こうした生産活動の上の輸出に政府は関与出来ないというのです。セーフガードと言うのは國家間の関係です。これは違うのです。実態は日本企業が来て勝手に作り、持ち帰っている。それを國家が統制できないと言うのです。ましてや日本との合弁企業にああしろこうしろとは言えないのです。

そういう中でじいたけじいたいじいたいといふたら良いのだらうかということが出でるわけです。ネギを作る、じいたけを作るのも、技術革新をする。私なりに計算してみると、新技術をやって、大規模経営をして生産性を上げても、生産費は大して下がらないのです。しかし、日本は流通経費が高いのです。それに對し中国輸入品は流通を大幅にカットして実需者に行くようにしています。外食産業だとが食品加工業へ直に行く。

日本は流通のコストが非常にかかるのです。これも中國側は良く調べていますが、農協で何%、經濟連が取る。全農も取る。卸と中卸と小売も取ります。味の問題、品質の問題がありますが流

通のシステムのあり方を改めて真剣に考えて、その改革をはかることが必要ではないでしょうか。

(III) JA甘樂富岡の新たな戦略

そこで、経営指導体制を全面的に改革し斬新なマーケティング戦略を打ち出したJA甘樂富岡にふれておきたい。それを乗り切れたのです。乗り切ったのはどういうことかと言いますと、トアなどにバック入りで持つていくわけです。値が高いとき、キユウリが高いときは同じ100円のパックで、一本しか入ってないときもあるし、安い時は五本入るときもあるのです。それから曲がったキユウリは、「曲がってごめんなさい」という袋で、それがまず最初に売れるのだそうです。半日で売切れてしまいます。不思議ですね。これも商標、ブランドです。

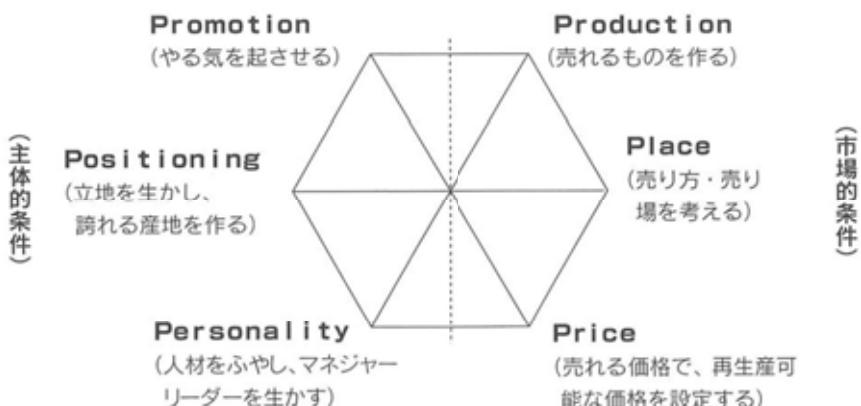
それから複合総合相対取引というのはこういう発想が元にある。スーパーに来た奥さん方が、一日一回野菜を何品買うか。そうすると七品から一五品の間くらいです。これが難しいのです。こういう統計がないのです。消費者は一日に何品買うか。それもキャベツ、ダイコンといふ話ではなくて、ニョウガ、ショウガ、オオバなどいろいろあります。全部小間物も含めて何品か。皆さんすぐ答える人はいますか。

ここに黒澤君たちは目をつけました。例えばの話です。六トン車に10品目積みます。時期によっていろいろ違いがありますが、キャベツ、ダイコン、レタス、ジャガイモ、トマトたくさん入つていて10品目。時期によってはぐらばうに高くなるものもある。

販売戦略の展開 — P-six 理論 —

- (1) Production (売れるものを作る)
- (2) Place (売り方・売り場を考える)
- (3) Price (売れる価格で、再生産可能な価格を設定する)
- (4) Promotion (やる気を起させる)
- (5) Positioning (立地を生かし、誇れる産地を作る)
- (6) Personality (人材をふやし、マネージャー、リーダーを生かす)

図3 農産物の販売戦略とシステム（P-six 理論）



キユウリはべらぼうに高い。その代わりトマトは安いだとか、こういう差があるわけです。しかし二〇品目入っていて、この六トン車一台を五〇万円でどうだ。五〇万円で取引します。これを種子を播く前から決めておく。そして生産者に作付面積予約をしておく。簡単に判りやすく言えばこういう売り方なのです。消費者のニーズ、スーパーのニーズに合っています。スーパーはそれに乗つてくるわけです。判りやすく言えば複合総合相対取引というのはこういうことです。これでデーターを見ますと、要するに一〇〇円で売つて、生産者手取りが八〇円ぐらいです。ところが卸売市場を通すと、一〇〇円で三八円の手取りです。それが先ほどの流通過程のコスト高の問題です。農協が取るのを悪いとは言つていません。取らなかつたら、営農指導から販売も出来ませんけれども、JA甘楽富岡というのは、営農指導事業に対して信頼や共済から恩に着せて支援いただかないで、自分で独立採算でやろうという路線を目指しているのです。その代わり購買事業も肥料、農薬から種までいろいろ要りますから、営農指導本部ですべて総合的に対処していくというところなのです。だから販売から購買、全てをやって、それから指導、マーケティングをもち

ろん中止にします。簡単に言えば、この活動をしたいのです。

手取りが高いですから、組合員たちは老若男女皆田が輝いて、朝六時じろに行つてご覧なさい。集荷場はパック詰めのコンテナをもつてきた生産者であふれています。インショップといふのは、甘楽富岡農協が主導権を持つて販売しているのです。店を借りて、間口を借りて売っているのです。それから複合総合相対取引というのは、これは例えば西友ストアや生協などの希望に応えプライベートブランド商品になるようにパッケージがしてあって、コンテナ輸送です。リターナブルなコンテナ輸送です。

この甘楽富岡の話を北海道とは立地が違いますといわないで欲しいのです。販売戦略の原理原則を考える、それがP-16です。今村はCとかPとかが好きだねと言われますが、これはアメリカの学者が言つているのは、プロダクション、プレイス、プライス、プロモーションまでです。ここまではアメリカの著名なマーケティング学者が言つています。しかし、ポジショニングとバーソナリティは言つていらないのです。こういう六角形にももちろん書いていません。相互関連はどうかとも書いていないのです。ですが、その辺を私はさらに進めたつもりなのです。日本の農業・農村、そしてJA改革を念頭において考えたものです。

III 世界的視点に立ち戦略を

「アメリカには空間があるだけだヨーロッパには時間の上に空

間がある」これはベルナール・ファイの言葉です。これを見たときに私は目から「うわ！」が落ちました。「これだ」と思いました。ここから日本のあるべき方向、北海道のあるべき方向を考えてほしい。それから「時計の針を止めず分解修理しなければならない。難しいことだ」これは東畑先生の言葉ですが併せて考えるなり。プロダクションをマイキングからグローバリングへ転換する。これをやつていかなればならないと言うことです。理由は先ほど話しました。また合わせて、時間がないので付属の参考資料をあとで読んでください。

IV むすび—地域リーダーへの提言七箇条

結びは、今日は地域リーダーの皆さんにおいでですか、私の信条みたいなものを皆さんに差しあげたいと思います。初めの五つは昔の賢人の言葉を頂いているのですが、最後の（6）は誰でも知っていますが、私の造語です。「適地適作・適地適策・適智適策」その地域に合った地域創造型農政というのはこういう四文字に整理できます。それをさらに進めて、地域それぞれ智恵の蓄積があるわけです。その衆知を集めて地域農業活性化の政策を作らなくてはダメだと。これは農家だけ、農業者・農民だけの狭い考え方ではためだよと言つているのです。出来れば日本中の世界中の智恵を集めて自分達の所へ持つていき、新しい政策を作るといふことを考えています。

(7) の「計画責任・実行責任・結果責任」では、私は今は会長をやっていました、一〇カ年先の計画を作りました。五年間ひと

地域リーダーへの提言 7 力条

- (1) 溫故知新（「論語」為政）
- (2) 先憂後楽（岳陽樓記）
- (3) 実事求是（「漢書」景十三王伝）
- (4) 訥言敏行（「論語」里仁）
- (5) 心高身低（廣瀬淡窓「家訓」）
- (6) 適地適作・適地適策・適智適策
- (7) 計画責任・実行責任・結果責任

に見直すとなつておりますが、これから一〇年先まで多分生きているでしようが、会長はやめております。七〇歳定年制と自分で言い出して、あと一年やればいいのですから。しかし結果責任は取らうと思っています。ただその間の実行責任が大事です。これは、しかし私だけの話ではなくて、皆さん方が役場や農協へ行って、地域振興計画を例えは作ることになつたとします。しかしそれは非常に大きな計画責任を伴うのです。同時に実行責任と合わせて結果責任を取らなければならない。このことを本当に考えた時に計画とはどうふうことであるかが、よく判つていただけると思います。

最後に私の作った川柳（季語がないので俳句ではない）を紹介して終わりにしましよう。「私は我されどなお問う共と協」。これも読めばわかりますが、「我は我」というのは竜が俺がという自己責任の原則問題なのです。しかし、同時に別の意味で言えば「我は我」というのは市場原理、市場メカニズムを指しているのです。しかし市場原理だけで上手くいきますか。そうじゃないでしよう。「されどなお問う」というのはそういう意味です。農業農村というのはそうではありません。市場原理だけではうまく行きません。共益を追求し、心と力を本当に合わせていく地域を作つていかなくてはだめなのだということです。心と力を合わせる本当の「協」がこの頃少しだめになりつつあるのではないか。いろいろな組織が市場原理ばかりに追われていつていやしないかという事を感じているのですから、最後に述べてみました。以上で終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

カット野菜の現状と展望

北海道大学大学院農学研究科・研究生

杉村 泰彦

◆◆はじめに◆◆

かつて、野菜作の導入が収入増加への切り札のように言われていた時期があつた。しかし、何もかも輸入されている現在では、野菜を生産するだけで収入に結びつくとは限らない。そこで、どういう方策をとり得るかと考えてみると、まず第一に思いつくのは、作付面積を拡大し、たとえ薄利であっても多売することである。第一には自分で作った野菜を自分で売ることによつて利さやを増やす方法もある。そして、第三の方策としては収穫した野菜の付加価値を高めることがあげられる。付加価値の高め方にもいろいろあるが、カットなどの一次加工はその方法の一つである。生産者の中にも一次加工を高付加価値化の一つとして、商品開発のチャンスとして捉え、実践している方々もいる。しかし、他方では、カット野菜も含めた加工需要をあくまで規格外品などのいわゆるB級品の販売先として位置づけている生産者も多いのではないか。

需要面から見ると、ここ二、三年、カット野菜の売り上げは順調である。統計的に厳密に把握することは難しいが、その市場規模は約一〇〇〇億円といわれている。もともとカット野菜は、外食産業向けの業務用需要が中心であった。しかし、最近、自立つようになったのはスーパーやコンビニなどで一般消費者向けに売られるものだ。大手スーパーではサラダ類の棚が大きく拡大し、主なデパートの食品売り場にはサラダ専門店が出店するほどである。このような一般消費者向け市場の規模は約一〇〇億円といわれる。そこでは、食材の高級化も並進している。

杉山 泰彦（すぎやま やすひこ）さん

1971年 香川県生まれ
1995年 明治大学農学部農業経済学科卒
2000年 北海道大学大学院農学研究科生物資源
生産学専攻修了 博士（農学）
現 在 北海道大学大学院農学研究科・研究生

「トバ地下」のサラダ専門店に至っては、サラダが高級食材やケーキと同じようにショーウィンドウの中に納められている程である。かつてのカット野菜や出来合サラダへのイメージ、「鮮度が悪く見た目にもまずそうなサラダ」というイメージは、もはや過去のものとなった。

しかし、カット野菜市場の全体像は非常に曖昧としている。そこで、ここでは消費動向の整理と一次加工場でのヒアリングから、カット野菜がこれまでどのような背景で消費拡大を果たし、現在はどのような課題と展望を抱えているのか考えてみたい。

◆◆カット野菜の現状◆◆

一、カット野菜とはどのようなものか

カット野菜は使用目的によって、サラダや付け合わせよう生のまま使用される「生食用」と、料理や加工食品の素材として加熱処理される「調理・加工用」に分類される。一九九九年に発行された農産物流通技術研究会編「なんでも分かる青果物流通」によれば、前者の比率は約六〇%、後者が約四〇%となっている。大まかにはこの分類によってカットの方法も決まり、生食用ではキャベツなどの千切り、レタスなどの角切り、たまねぎなどのスライス、調理・加工用ではにんじんやじゃがいもなどの短冊、ダイスなどが主なカットであろう。いずれにして同じ野菜が様々な形にカットされるため、カット野菜はかなりの種類が存在する。さりとて、単品種の野菜のみではなく、

複数の野菜がミックスされたサラダ類のような商品もあるため、商品数としては膨大である。

このような事情もあって、カット野菜の市場は統計的に全体像を把握することが困難で、その規模についても統計的資料はほとんど無いに等しい。数少ない資料として、カット野菜メーカーの業界団体「青果物カット事業協会」が「OOCO年にメーカー一六一社を対象にアンケート調査を行っている。その概要が「農林リサーチ」二〇〇一年二月号に紹介されている。直接使用することができないので、まずはそれを引用してカット野菜についてのアウトラインを確認してみよう。

これによると、カット野菜の製造業社は、過去一二五年間に全体の八七・三%に当たる業者が製造を開始しており、特に一九九五年以降に全体の約ハ%が製造を開始している。したがって、カット野菜の業界はまだまだ新しい分野といふことができるだろう。

販売先については、スーパー・デパートが約三五%、惣菜産業も約三五%，外食産業が約一七%となつてゐる。販売額の比率では第一位が外食産業の約三〇%，第二位はスーパー・デパートで約二五%，第三位は惣菜産業の約二二%，第四位がコンビニの五・五%であった。これを類別にすると、外食産業と惣菜産業、その他の給食などで約七〇%に達するのに対し、小売業は約三〇%程度にとどまつてゐるのが実態のようだ。

カット野菜を種類別販売金額順に並べると、第一位がキャベツになり、第二位がたまねぎとなる。以下、にんじん、じぼう、ミックスサラダと続いている。



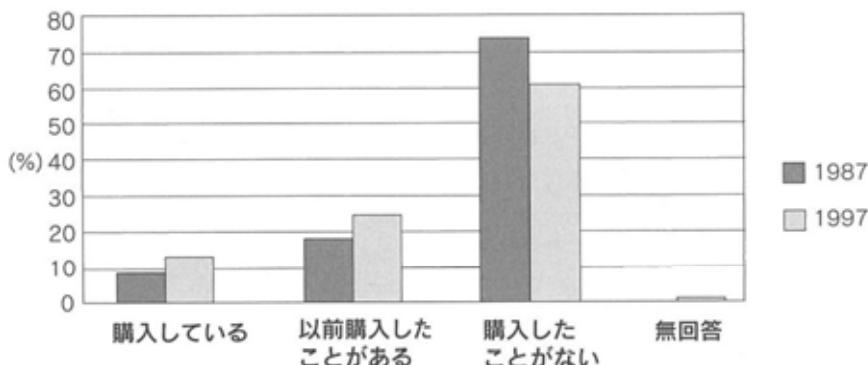


図1 カット野菜の利用状況

資料：農林水産省「野菜の消費について」(1987.12調査)
 農林水産省「野菜及び野菜加工品について・食料品の容器包装について」
 (1997.7調査)
 注：1) 農林水産省が全国主要都市在住の同省主婦モニターを対象として
 調査した。
 2) 食品流通情報センター編『食生活データ』の再掲載から引用した。

また、この調査とは別に、先の農産物流通技術研究会の資料によると、製造されたカット野菜の三七%が関東地方で販売され、関西と東海を含めた三地方で全体の約七〇%に達することから、都市圏中心の市場一ースであるとしている。

以上の記述を見る限りでは、依然として、カット野菜の需要は外食産業や惣菜産業を中心となっている。確かに、外食産業において「サラダ・バー」方式を導入している店も珍しくなくなり、弁当類でも野菜を取り入れたメニューは増えてきているようだ。ただ、前述のようにスーパー・デパートでカット野菜販売は著しく充実してきており、一般の消費者にとってカット野菜の商品選択の条件が大きく改善されたのは間違いない。その面からは、カット野菜が外食などの業務用需要を中心としたがらも、家庭用需要へと大きく幅野を広げていているのは間違いないといえよう。そこで次に、消費者がカット野菜についてどのような意識をもっているのか、各種アンケートの結果を引用しつつ整理してみよう。

二、消費者はカット野菜をどうとらえているか

図1はカット野菜を利用したことがあるかどうかの調査結果、表1はそれを年代別に示している。調査対象は農水省が選定した主婦モニターなので、市場全体の傾向をそつくりそのまま反映しているとはいえないだろうが、それでも、ここからある程度の傾向を読みとることができる。図1によると、一九八七年と一九九七年を比較すると、「購入したことない」が減少し、「購入している」と「以前購入したことある」が、それ

表1 カット野菜の利用について（年代別）

(単位：%)

	20歳代		30歳代		40歳代		50歳代		60歳代	
	1987	1997	1987	1997	1987	1997	1987	1997	1987	1997
購入している	8.8	22.4	8.7	15.5	8.0	9.7	9.8	13.6	10.5	12.4
以前購入したことがある	31.6	40.8	22.7	26.2	16.2	23.3	13.5	22.9	11.9	23.0
購入したことがない	59.7	36.7	68.7	58.3	75.8	66.1	76.7	61.9	77.6	61.9
無回答	-	0.0	-	0.0	-	0.8	-	1.7	-	2.7

資料：農林水産省「野菜及び野菜加工品について・食料品の容器包装について」(1997.12調査)

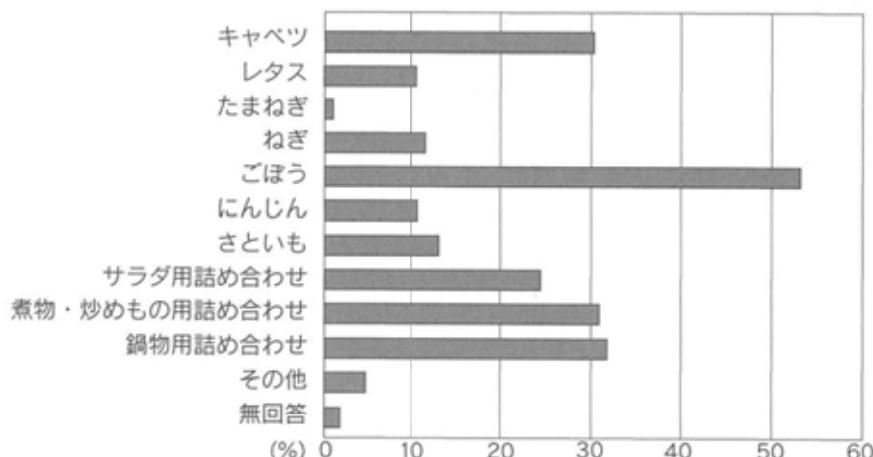


図2 よく購入するカット野菜品目

資料：農林水産省「野菜及び野菜加工品について・食料品の容器包装について」(1997.12調査)

注：1) 農林水産省が全国主要都市在住の同省主婦モニターを対象として調査した。

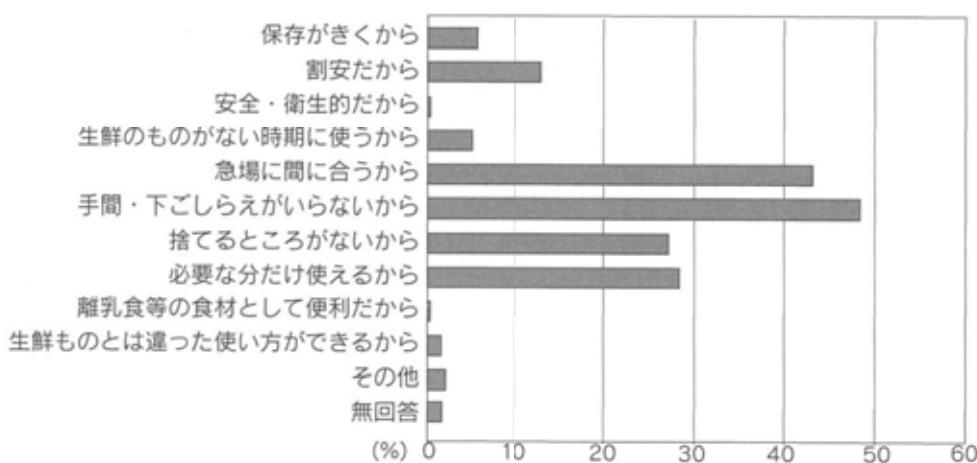


図3 カット野菜を購入する理由

資料：農林水産省「野菜及び野菜加工品について・食料品の容器包装について」(1997.12調査)

それ微増しつつも、全体的には依然として六〇%が「購入したことがない」としている。年代別に見ると、一〇歳代と三〇歳代で「購入している」という回答が大幅に増加している。六〇歳以上も増えているが、微増にとどまっている。これから、過去一〇年間におけるカット野菜の家庭消費の増加は、利用層が若い世代に広がったことによつてもたらされたことがわかる。

次に、図2ではカット野菜を購入した品目を示した。比較的下ごしらえが面倒なごぼうが最も高い比率で利用されている。また、単品目よりも複数の野菜の詰め合わせの方が相対的に高いエイトをもつてゐるのは、家庭用需要の特徴であろう。

そこで、図3からカット野菜を購入する理由を見てみると、やはり「手間・下ごしらえがいらないから」(四八・一%)のウエイトが高い。その次の「急場に間に合つから」(四一・九%)も、場面の違いこそあれ、要するに手間がかからないことをメリットと感じてゐると考えられる。その点、第三位の「必要な分だけ使えるから」(一八・七%)は少し性格が異なる。例えば、キャベツや白菜などの重量野菜は、家族員数が多くれば短時間のうちに使い切ることも可能だが、少人数の核家族では余してしまることが多い。ましてサラダの素材として使用する場合などは、それそれは少量ずつしか使わないのだからなおさらであろう。この点については、カット野菜であれば適量での購入が可能である。第四位の「捨てるところがないから」(二七・一%)の意味するところは、要するに生「ミの発生を敬遠しているものと考へられる。野菜の場合、芯などの食用に向か

ない部分が必ず含まれており、そのまま生「ミとなる。このような非可食部分は、多いもので三〇～四〇%程度も含まれているため、生「ミとしてもそれなりの量にはなる。その点、カット野菜には非可食部分はあまり含まれていない。

図4は、これまでカット野菜を購入したことがない人を対象に、利用しない理由を尋ねた結果である。これによると半数以上の人人が「自分で作るから」(五一・三%)を選択しており、次に「生鮮もので十分間に合うから」(四六・五%)が続いている。

理由はいろいろと考へられるが、これらは要するにカット野菜に利便性を感じないという回答である。以下、「安全性に不安があるから」(三四・一%)、「割高になるから」(一三・三%)と続いている。この結果を逆に考えてみると、カット野菜の購買層になりうる消費者が、実際の購買に踏み切るのに当たつて最大の障害となつてゐるのは、その安全性についての疑問ということになる。

図5は、惣菜・弁当の購入基準を尋ねたアンケートのうち、サラダ類についての回答である。これによると、サラダ類の購入基準として圧倒的に重視される要素が「鮮度がよいもの」(七〇・三%)であることがわかる。これらの基準のうち「量や大きさが適当であるもの」(一八・一%)は、カット野菜本来の利便性を期待する回答だが、「食味がよいもの」(二八・五%)や「栄養バランスがよいもの」(一八・三%)、「旬の野菜や特産品を利用しているもの」(一四・五%)などへの回答が比較的多い。ということは、カット野菜には、こだわった素材による高級感や健康増進に貢献する機能性も要求されはじめていることを示

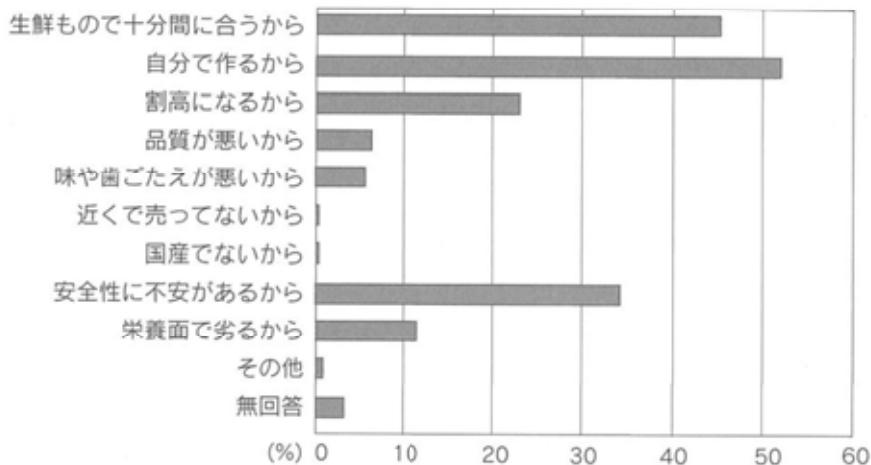


図4 カット野菜を購入しない理由

資料：農林水産省「野菜及び野菜加工品について・食料品の容器包装について」(1997.12 調査)

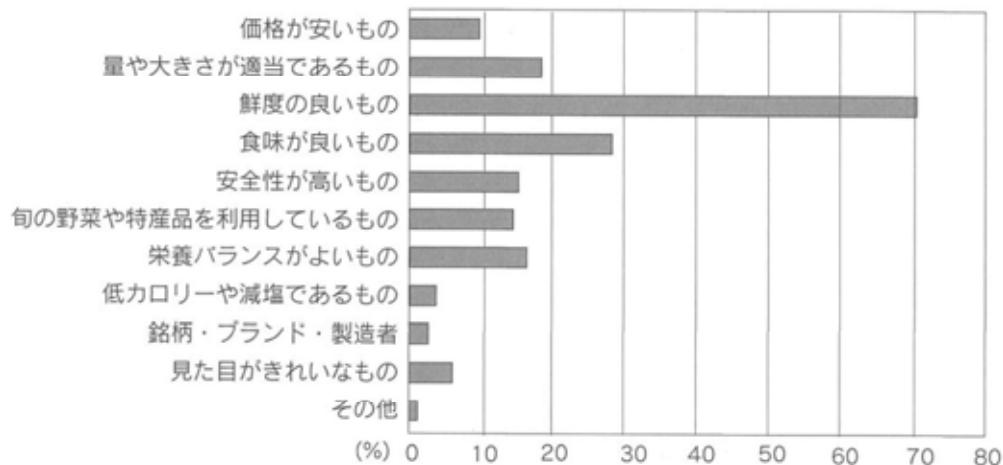


図5 サラダ類の購入基準

資料：農林漁業金融公庫「食品の購入基準・意識に関する意向調査」

注：食品流通情報センター編「食生活データ」の再掲載から引用した。

している。また、ここでも「安全性が高いもの」(一八・五%)は三〇%弱の回答があつたが、意外なことに「価格が安いもの」(九・六%)という回答は一〇%未満にとどまっている。

以上から、消費者がカット野菜をどうとらえているかについて整理してみる。最近一〇年間については、カット野菜の消費拡大は若年層を中心としていた。ここでカット野菜が受け入れられたのは、

①下むじりの手間が省けること、

②家族数の減少を背景とした適量購入が可能ないこと、

③生「ミ」の敬遠を志向していること、

などの理由からであった。そして現在、カット野菜の関連商品に求められていることとしては、第一に適量であること、第二に良食味など高品質な素材であること、第三に少量多品目の野菜を組み合わせて使用すること、そして第四に素材から製造までの安全性確保とその情報の公開といつことである。昨今の大不況の中でも、「これらはいずれも「低価格」ということよりは重視される要素となつてゐるのである。

前述の通り、現在、ダイエー・西友、イトーヨーカドーなど大手のスーパーは、ことりとくカット野菜と関連商品の品揃えを充実させている。そこで販売されている商品を手に取つてみると、消費者が要望する上記の四点を強く意識していることがよくわかる。だが、このような傾向に供給側のメークーはどう対応しているのだろうか。そこで、以下では、カット野菜の流通において需給の結節点となる一次加工場の現状を整理してみる。

◆◆カット野菜工場の現状◆◆

一、ホクレン石狩野菜センターの概要

札幌市の北隣、石狩市の流通団地の一画にホクレン石狩野菜センターがある。ここは、道産野菜のパッケージングと一次加工を担当する施設で、一九九一年に稼働を開始している。さらに、一九九七年には施設を増強しカット野菜の生産能力が大きく向上した。設立に当たっては、食生活と「一ズの変化に伴い需要が増加したことと、それに対応した商品企画の拠点となるということ」を目標として掲げた。要するに、青果物の加工品製造を通じて実需向け販売の拡大を図ることが、この施設の目的である。

石狩野菜センターが保持する約一万一三〇〇坪の広大な敷地内には、パッケージ部門棟と一次加工部門棟に分かれて並んでいる。このうち、カット野菜を製造するのは一次加工部門で、延べ面積約四三〇坪の一階建ての建物に、収容能力約四三㌧の原料貯蔵庫と約二ハッパの製品貯蔵庫を併設している。

この石狩野菜センターのコンセプトは、安全・安心な素材を確保し、高度な技術を用いて貯蔵・選別・パッケージング・カット加工までを一貫して行う「総合システム施設」というものである。そこで、表2のカット野菜の製造工程を見てみると、徹底したシステム化が因れることがわかる。また、近年は特に厳しく衛生管理を求められているが、この場合は工程別に完全な隔離処理を実現した高度な管理体制となつている。さり

表2 カット野菜の製造システム（ホクレン石狩野菜センター）

主要設備	原料受入室	原料冷蔵庫	原料荷捌室	前処理室
操作	原料受入検査	入庫	原料投入	トリミング・ピーリング
操作管理点	原料品質	温度・先入・先出し	異物混入防止	機器正常作動
衛生管理点	昆虫進入防止	庫内衛生状態	泥・腐れ除去	機器・器具・作業員の衛生状況
清潔度	一般	一般	一般	準クリーン
温度℃	常温	5℃	常温	15℃
洗浄			自動水洗（土物）	電解水洗浄（皮付きばれいしょ）

主要設備	加工室					
	一次殺菌洗浄	カット・スライス	二次殺菌洗浄	仕上げ洗浄	脱水	計量
操作					包装	
操作管理点	電解水能力	機器正常作動	電解水能力	チラー水温度	検品・異物混入・重量・包装	
衛生管理点					機器・器具・作業員の衛生状態・室内衛生状態	
清潔度	クリーン	作業区域				
温度℃		15	℃			
洗浄	電解水洗浄		電解水洗浄	冷水洗浄		

主要設備	ピッキング室		製品冷蔵庫	出荷荷捌室
操作	金属探知	ピッキング	製品予冷・保管	出庫
操作管理点	機器正常作動	製品数量	温度	設備正常作動
衛生管理点	室内衛生状態・作業員衛生状態		庫内衛生状態	室内衛生状態
清潔度	一般		一般	外気と隔離
温度℃	10	℃	5℃	低温
洗浄				ドッグシェルター エアーシェルター

資料：ホクレン石狩野菜センター資料から

二、カット野菜の販売と原料調達

図6に示したように、石狩野菜センターの取り扱いはパッケージ野菜が圧倒的に多くなっている。しかし、カット野菜は年々ウエイトを伸ばしており、二〇〇〇年度には金額で約二〇%を占めている。品目別に見ると最も多のが玉ねぎ、次がばれいしょとなつており、この二品目でカット野菜取扱の約七〇%を占める。これは、ほぼ通年供給が可能な「得意品目」であることが背景にあるが、それらも含めたカット野菜のアイテム数は約三〇品目となつており、近年も増加傾向にある。石狩野菜センターではそのまま店頭販売されるカット野菜の商品は製造していない。カット野菜の販売先としては、大手コンビニエンス・ストアの北海道地区への納品を担当している弁当製造業者が主力となつており、全体の約四〇%を占める。他の加工業者へは約三〇%、スーパー向けも約三〇%という構成で、納品先とし

に、前述のように消費者は「安全・安心」を強く求めている。それに対応して、石狩野菜センターでは素材となる野菜の殺菌には薬品を使用せず、電解水（食塩水を電気分解して生成されたアルカリ性の機能水）を用いている。これにより、薬品を使用せず安全性が向上するだけでなく、野菜本来の食味や食感の保持を可能とした。

ては約五〇社にも達している。

石狩野菜センターの原料調達についてみてみると、道内産地からの調達が八〇%、道外産地や卸売市場からの調達が一〇%となっている。道内産地からはホクレンの支所を通じて各農協と契約し集荷するのだが、石狩野菜センターの原料調達はすべて買い取りによつて行われている。また、生産者団体が運営する施設として特徴的なのが、産地から無選果、無洗浄で原料を受け入れていることである。これは産地のコスト低減とロスを減少することが目的で、選果と洗浄は石狩野菜センターで受け入れ後に行われる。そして、A品はパッケージ用へ、B品はカツト用へと振り向けられているのである。

三、課題と対応

現在、一次加工場が顧客であるコーナーから要請されているのは、第一に価格の低下であり、第二に産地指定や食材の高級化など商品差別化であると言われている。このことは、石狩野菜センターも同様である。しかし、価格の低下や食材の高級化はそう簡単ではない。価格低下に必要なのは、原料価格を下げるのことと稼働率を上げることである。しかし、石狩野菜センターが生産者からの買い取り価格を大幅に下げたり、輸入に振り替えたのでは生産者団体が設立・運営する意味がない。また、稼働率を上げるためにには処理能力を発揮できる原料、つまり規格が整ったA品が必要である。しかし、石狩野菜センターの場合、B品をカット野菜の原料にすることは存立意義とも関わつており、製造機械もB品処理に合わせたものとなつてゐる。さ



玉葱剥皮機



加工室

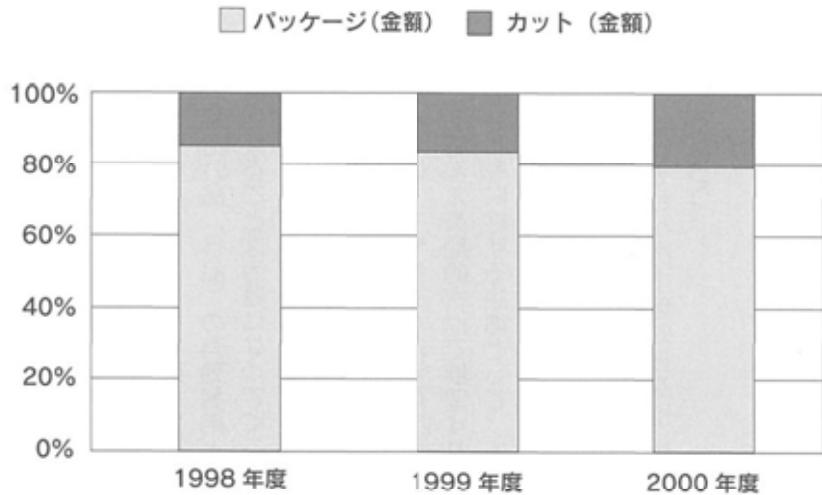
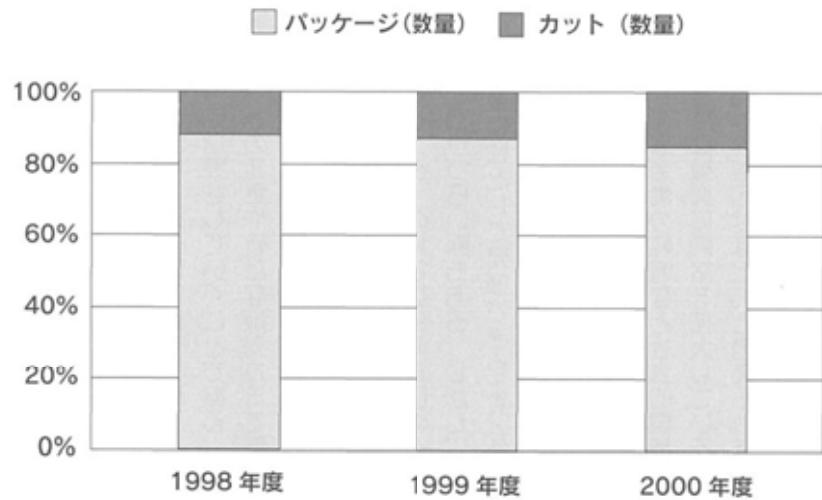


図6 石狩野菜センターにおける処理形態別の取扱状況

資料：ホクレン業務資料

注：パッケージの中には原体などの項目も含まれるが、いずれもパッケージ関連商品のため、ここでは区別していない。

りに、高級化という面では、いわゆる「こだわり」野菜を素材として使用することや、カット後の品質劣化が緩慢な加工専用品種の導入が考えられるが、これらも短期間のうちに対応することは不可能である。そこで、工場のシステム自体の見直しも含めて、これらを長期的な課題と位置づけている。

そのような中で、石狩野菜センターは短期的には次のような対応を行っている。まず、第一には既存の商品を重視し、新たな視点でコーナーに提案をしていくことである。例えば、ばら売りなど販売ロットの変更や新たな販賣方法で顧客にアピールするなどである。第二に産地に密接な関係にあることを活かして、味や口持ち、使いやすさや価格など、商品や産地についての情報を提供することである。一次加工場の運営としてだけ考えると、石狩野菜センターの場合は生産者団体としての役割があるゆえに対応がとりつい面もある。しかし、逆に生産者団体であることを優位性として發揮できるような積極的対応を行つてゐるといえる。

◆◆まとめ◆◆

家族数の変化や家事労働の軽減など社会的環境の変化を背景として、カット野菜は順調に需給を拡大している。現状では少なくとも縮小に向かう要因はほとんど考えられず、今後も消費

拡大が続く可能性は高いといえよう。その意味では、カット野菜は有望な市場である。

しかし、原料の供給先としてのカット野菜製造業は、必ずしも有望な市場であるといつだけではない。今口では生鮮野菜の

市場自体に輸入品との競合が発生しているが、冷凍保存やさまざまな技術を駆使できる加工品の場合、それはより激しくなると考えるべきであろう。また、コーナーからは低価格化や差別化を厳しく要求される。このような事情を踏まえれば、今後は、カット野菜の原料として作業効率の向上が図れる規格品(A品)や、有機栽培や減農薬栽培の野菜を使用するウェイトが高まつてくる可能性もある。そうなれば、生産者にとってはこれまでのような規格外品(B品)の有効利用という視点でカット野菜の市場を捉えることは困難になつてくる。

石狩野菜センターのケースでは、市場への対応次第では依然として生産者側の優位性を保てる可能性があることも示された。しかし、消費面では生鮮野菜の市場に付属した存在だったカット野菜の市場は、今や独立した消費市場として成長しつつある。この変化を踏まえ長期的視点で展望すれば、近い将来にはカット野菜の原料を供給する産地として、加工用品種の生産や「こだわり」のある野菜の供給などといった独自の対応が求められることになる可能性は高い。したがつて、今後、産地としては生鮮品の市場とカット野菜の市場をそれぞれ独立したものとして捉え、それそれへの市場対応を別途に考えるのも必要になつてくるだろう。

参考文献

- 一、農產物流通技術研究会編『なんでも分かる青果物流通』養賢堂、一九九九年
- 二、(社)北海道地域農業研究所・北海道立中央農業試験場「共同研究青果物のパッケージ流通の実態と産地対応のあり方」一九九六年

「田舎って、

どんなところ？」その4

生かすも殺すも親次第

リゾート
カントリーマーケット 里贈人

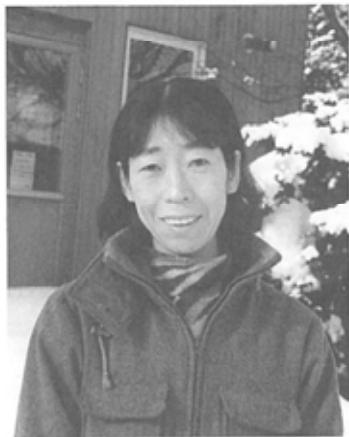
栗井 文子

各期間になると、農繁期の間、忙しくて中々集まる事も出来ないせいかフォーラムや研修会等、行事が目白押しに各地で開催されています。

私が若かりし頃は、農業は仕事がキツイ・汚い・危険の三Kの産業という概念が広く一般的には言われていましたが、今、活き活きと生活や仕事を楽しみながらメディアの世界の人達からも注目を浴びているような農家の人は達は、経営能力や企画力が豊富で希望に満ちていて、新しい意味での三Kの産業として農業と向き合い、楽しんでいるように思えます。

私達の親世代では、相手の顔を結婚式まで一度も正面に見た事が無いままで嫁ぐという事もよくあつたと聞

きます。今では信じられない結婚の形態やその後の生活を営んできた人も多かったのでしょうが、近頃話題になるような農業者は生まれつきの農家生まれの娘を嫁にするというよりも、非農家やOJをしていたというような異業種や、他府県から何の知識も偏見も持たずに農業の世界に魅せられて結婚した人や、新規就農などで苦労の末に今の農業の形態を築き上げてきたような、逞しい精神力や好奇心旺盛な人が多いように思います。何の先入観も地域の常識も殆んど知らないがために、側から見ると「何を考えているんだろう?」と思うような、既存の農家では思いもつかないような事を平然と実行に移してしまつような、逞しい行



粟井 文子（あわい ふみこ）さん

埼玉県生まれ。

大宮保育専門学校卒業後、江別の町村農場に実習したのが縁で結婚、就農することになる。

H7年に農水省が開講したグリーン・ツーリズム専門家講座を受講したのがきっかけで、H9年6月に自宅の一角に、直売所を兼ねた農業情報公開の店舗をオープンさせる。

農村社会のことを広く多くの方に知って貰いながら、興味・関心を深めて農業応援団を育てたいという思いから、H10年には貸農園も始めた。

粟井農園 カントリーマーケット 里贈人

江別市西野幌 127番地2

動力も兼ねそなえた人が多いのではないかでしょうか。

親世代が仲良く楽しそうに仕事をしていて、生活の上でもそれなりの楽しみを持つているような後姿を見ながら育つた子は、周囲や親が何も言わなくとも自然と後継者として育つ事が多いくらいに思ひます。機械化に頼らず、子供の出来る仕事を幼い頃から自然のうちに与え、家族の一員として労働力として認めたら、自分も家族の役に立っているんだという自覚を持つ事が出来るし、農業と子育ての接点が日常生活の中で知らぬ間に築けているような家庭では、後継者問題で悩む人は殆んどいないのではないかでしょうか。

子供は正直です。自分の母親の幸せそうな笑顔や楽しい家

庭の雰囲気の中で育つと、世に言う刷り込み現象のように、それらの事を捉え、自分も親の仕事を継いで認められたいとか、年々老いていく親の労働力を軽減させてあげたいと、自然と思うようになる事が多いのではないかでしょうか。

ただ、今の農村社会は、やつと近年男女共同参画（イコールパートナー）という言葉が始めたばかりで、実際にはJAの役職員や女性農業委員の数だって、まだほんの数%にしかすぎず、たとえ役員会や議会の中で発言をしても、意見（発言）は握り潰されてしまっています。

社会の尤も大きな組織である国会の場ですら、女性議員

の声はあまり聞いて貢えていないのが現実ですもの。お題目のような政策で聞こえの良いスローガンを掲げたって、初めから眞面目に取り組もうと、眞剣に人として向き合つてくれている人がどれだけいるところなのでしょうか。

僻みでも妬みでもなく、自分にとって有利（有益）な今までの立場や居場所をそうそゝ易々と譲ってくれる人など、今の世の中に存在するのでしょうか。まあ、私が出会った素晴らしい男性諸氏の中にはぐくまれにそういう人もいらっしゃいますけれど、「爪の垢を煎じて飲ます」という言葉を、その爪の持ち主の方のようにならうに変えたいと思うような人に飲んで貰えたら、そして実際に飲んだ人が変わるもの

なら試してみたいものです。

「」一〇年位の間、道内・外を問わず、グループや個人であちこちの優良農家や優良地区の視察研修を私自身見て解った事なのですが、今現在脚光を浴びているような農家や農村地域は、現役の農業者の魅力やバイタリティー

溢れる行動力の裏側に、必ずそれを理解し支えてくれる親世代の影の力が存在している、ということです。

技術や経験が未熟な若い世代の人の言葉であっても、それをきちんと受け止めて後押しする姿勢を持つ魅力的なお年寄りの言葉を聞く度、「あー、こういう人達が居るから、この家（この地域）はこんなにも素晴らしいんだ」とい

う事が一目瞭然として解りました。年は重ねていてもそういう方と話をするが、年齢や時の過ぎていくのも忘れてしまう程、話に聞き入ってしまいますもの。

それと、意外に勘違

道外の農村の方が意識改革が進んでいて、女性の地位がきちんと認知されている所が多いという事。まあ、その背景には道外の農業の主たる働き手は女と老人という事があるでしうが。「農業王国北海道」などと聞こえの良い言葉の裏側では、道外と違つて農業の主導権を握つてゐる立場の人が、道内では圧倒的に男性が多いという力関係からか、封建的で女性や老人に対しても風評として伝わつてゐるといふ現実を何とも思わないという事実が、他府県においてしまう程、話に聞き入つてしましますもの。

（恥ずかしいとも感じない）人が、男女を問わず多いという不可思議な現象が罷り通つてゐるという事です。

ひと昔前、文字を読めない



人は文盲と呼ばれていました
よね。農村社会には意識の上
で知らされていない現実や、
意識を芽生えさせようとする
力を費そうとする故意の力が、
慣習だ伝統だなどと尤もろし
い理由付けの上で成り立つて
います。私は、それを意識上
の文盲のように感じています。
何故、自分が色々な目に見
えにくい力で押さえ付けられ、
虐げられているのかさえ気付
かずに生活する人を見て、心
がチクチク痛みます。知らな
いから、知らされていないか
ら上手くいっている所もある
かもしけないし、寝た子を起
こすようなことを懲らしく
ても、今までも自分は充
分幸せだと思っている人もい
るのでしょうが、時々、幸せ
の価値感について「今ま

で本当に良いんだろうか?」
と自問自答をしてしまつこと
が多々あります。

都会でも農村でも、男でも
女でも、そんな事は本当はあ
まり関係の無い事なのではな
いでしょうか? その前に、一
人の人間として、如何に自分
の人生や家庭や地域を一人一
人がどれだけ真剣に考えて生
きていくか、という事のほ
うが大切なような気がします。
田舎は、そういう事を再認識
するために、昔から、世界の
どんな貧しい国の中でも存在
してきたような気さえしてい
ます。

適齢期なんて今は無いと世
間では言われていますが、医
学的に見れば人間の生殖能力
や機能が正常に機能し、過剰
な医療技術を使わなくても、

母子共に健全で安心して子孫
を残していく年齢というも
のは本来有ると思います。た
だ、農村では男を後継者と考
える人が沢山いるためか、産
まれた時からずっと甘やかさ
れて育てられた男性が、適齢
期になつたときにそれまで
とは打つて変わつて、親に「彼
女はないの? 結婚は?」と
心理的に追い込まれ、拳句の
果てに「何を考えているんだ
か?...」と、見放されたよ
うな立場に立たされている現
実が有ります。そういう息子
を育てたのも自分達親だと自
覚すら持たない人が、愚痴だ
けはこぼし、まるで自分の息
子に嫁が来ないのは農業を
やつてしているからだとか、息子
に甲斐性が無いからだと思
いですか? 子供の将来の芽を

結局の所、日本の農業を消
滅の道に追い込んでいるのが
農家自身だという事すら気付
いていない。貴方の家は大丈
夫ですか? 子供の将来の芽を
伸ばすも芽を摘むのも、實際
は私達親の日常の積み重ねの
結果なのです。

人間、何事も諦めの境地に
なつたら、その時点でその事
は叶わぬ事となつてしまふの
です。今、子育てをスタート
したばかりの人、子育て中の
人、後継者に伴侶をと考えて
いる人。気付いた時が今まで
の考え方を変える、その時だ
と頑張つて下さい。

日本の農業の未来を案ずる
なら、親として心を鬼にして
遅しい子を育てましょ。今
より明るく楽しい農村を、次
の世代に残していくために。

—連載—



あのマチ・地域おこし活躍中 このムラ

No.27

黒松内町の事例

「ブナ北限の里、酪農郷の再生をめざして」

◇町の沿革と自然

「黒松内」の由来は、アイヌ語「クル・マツ・ナイ」で和人の女そのいる沢。かつて、出稼ぎの漁夫を慕つてきた女たちが船で北上中シケにあい遭難しこの地に滞留したのだろうか。美人が多いが、思いなしか面影に憂いを帯びているように感じられるのは、その由来を知つたせいか。一昨々年、町は開村一一〇年を祝つた。一八七九年（明治十二年）町の前身、旧三村の樽岸・

熱郛・黒松内に戸長（今で云う村長）が置かれた年から数えてのこと。これより遙ること二〇余年、幕府は一八五六年（安政三年）に蝦夷地の開拓のため長万部から寿都にいたる黒松内山道を開通させており、以来この内陸の地は交通の要衝となり、宗谷に至る日本海沿岸道の開削に弾みがついた。

町史をひもとけば、一九〇九年（明治四一・四・一）黒松内村村制施行、一九五五年（昭和三十・一・一五）黒松内村・熱

郭村・樽岸村の中の川地区が対等合併し三和村を設置、一九五九年（昭和三四・一・一）町制施行、同年（昭和三四・五・一）黒松内町に改称。

後志支庁寿都郡の行政区に属

し、管内一市一九町村のうちで一番南に位置しており、北海道内陸部への内玄関である。周囲町村には、管内の蘭越町・寿都町・島牧村、渡島支庁管内の長万部町、胆振支庁管内の豊浦町と、なんと三支庁五町村が隣接

はいない。

地域の広がりは、東西二九・三七、南北一九・七七、総面積三四五・四七㎢であり、その四分の三が森林、耕地は約三・七千㌶である。

長万部から寿都にいたる黒松内低地帯、町を流れる添別川等にはホタテ貝など海洋性の二枚貝の化石床が露呈しており、約七〇万年以前の太古の昔は海であった。この低地帯以南の植生は、ブナに代表される冷温帯の落葉広葉樹であり、低地帯以北

は北海道特有の針広混交林なのである。自生する「フナの北限」として知られるこの地は、学術的にも貴重なところ。また、黒松内低地には寿都湾に注ぐ本流の朱太川があり、これに何本もの支流が山林をかきわけて注ぎ込んでいる。主なものでも熱郛・添別・黒松内川とあり、そして歌才川はブナ林が育む清流に恵まれており、一帯は多くの生物にとっての小宇宙を呈している。

ここまで述べてみると、気象はさぞ穂やかなところだろうと想像されるが、思いの外厳しいのである。黒松内町は、東隣の蘭越町の盆地的気象と異なり、曰名峠に象徴される町境をなす

幌別岳、天狗岳から南南西にたわる山陵と、西側は黒松内岳から北西にのびて月越山脈とに挟まれた低地帯の中央に位置するため、日本海と太平洋の双方の影響を受けている。春から夏にかけて内浦湾に発生する海霧

は南北東の風にのり内陸深くに入り込み、日照不足と低温をもたらし、時として冷害となる。

風下の作開地区あたりは海霧は逃れるが風が強い。また冬は寿都湾方向からの北北西の季節風は、風上に当たる作開が地吹雪、風下の黒松内以南は弱風多雪となる。

年平均気温は七・二℃で、寿

都町の八・四℃、蘭越町の七・四℃に比較して低く、五・九月の平均気温は一八・一℃、一〇

・四月は〇・八℃である。土壤は粘質土が殆どを占めている。

→Jのような気象風土から産業を見てみよう。町勢要観から就業者一九七六年の構成をみると、第一次産業従事者は一〇%あり、内九〇%が農業従事者であり、漁業従事者はいない。因みに、

第二次産業は一八%、その八五%は建設業、第三次産業は五一%と高く、このうち七三%がサービス業等で、社会福祉関係

施設の充実ぶりが目につくのも頷ける。二〇%が卸・小売・飲食業となっている。

◇後志農業の中の

黒松内町農業

黒松内の第一次産業を支える農業について表1～3により、全道・後志支庁との対比におい

て特徴を見していく。表1において、一戸当たり耕地面積の大きさに示されるように、田が僅かにあり樹園に至っては数字に表

れて、一戸当たり耕地面積当たりの耕地面積で全道の約一・五倍を要してはいるが、

耕地面積当たりの生産農業所得は全道の六割弱、後志の三割にも達していない状況を踏まえ、

これが、畑の八割方が牧草地であることから、冷涼な気象に対応した酪農と畑作が営まれていることが窺える。表2及び3から後志農業は、大消費地札幌市に隣接する地理的条件から、道内の樹園地の六割を占める栗樹、水稻、馬鈴薯に代表される畑作、

野菜そして畜産と多岐に亘つており、畑作園芸部門の集約化も進むなかで、一戸当たりの耕地面積が全道の約半分であるにも

関わらず、耕地面積当たりの生産農業所得は約一・五倍となっている。そのなかで黒松内町は、管内農業の形態と異なつて耕地

面積の七五%が牧草地であり飼料作物と乳肉牛飼養が基幹作目となつていて、したがつて農業粗生産は、その八割を畜産に負つていて、

黒松内町は厳しい自然条件を抱えて酪農に期待を繋いでおり、一戸当たりの耕地面積で全道の約一・五倍を要してはいるが、耕地面積当たりの生産農業所得は全道の六割弱、後志の三割にも達していない状況を踏まえ、生産性の向上に向けて、役場やJAをはじめ関係機関団体が現在地域農業振興に真剣に取り組んでいるところである。

◇黒松内町の農業施策

平成十二年三月、町は「フロンティア21～二十一世紀を拓く力強い黒松内農業を目指して

表1 黒松内町農業の概要

項目	単位	全道	後志	黒松内町
総土地面積	千ha	8,345.22	430.55	34.54
耕地面積	千ha	1,187.00	37.60	3.68
耕地内訳 田	千ha	236.40	9.22	0.19
畑	千ha	950.93	28.41	3.48
煙内訳 普通烟	千ha	413.80	18.90	0.73
樹園地	千ha	3.63	2.03	0.00
牧草地	千ha	533.50	7.48	2.75
耕地率	%	14.2	8.7	10.7
一戸当たり耕地面積	ha	16.4	8.5	24.5
農家戸数	戸	72,315	4,441	150
うち専業農家戸数	戸	36,142	2,154	53
専業農家率	%	50.0	48.5	35.3
農家人口	人	291,341	16,438	521
総人口	人	5,726,184	268,086	3,613

表2 黒松内町農業の概要

項目	単位	全道	後志	黒松内町
水稲	ha	138,500	5,550	91
小麦	ha	94,700	1,130	7
ばれいしょ	ha	61,400	4,590	98
大豆	ha	14,900	660	38
小豆	ha	68,300	2,140	40
てんさい	ha	70,000	1,790	31
りんご	ha	949	479	-
ぶどう	ha	1,170	871	0
青刈とうもろこし	ha	37,700	657	192
牧草	ha	580,400	7,770	2,800
生乳	t	3,633,723	35,495	10,479
乳牛飼養頭数(H12.2.1)	頭	842,714	8,318	2,414
肉牛飼養頭数(H12.2.1)概数値	頭	426,036	5,781	2,870
農業粗生産額	百万円	1,057,403	45,434	2,533
耕種粗生産額	百万円	599,314	37,580	439
畜産粗生産額	百万円	457,793	7,854	2,094

表3 黒松内町農業の概要

項目	単位収量	全道	後志	黒松内町
水稲	kg/10a	534	510	436
小麦	kg/10a	317	123	229
ばれいしょ	kg/10a	3,673	3,290	2,898
大豆	kg/10a	269	248	232
小豆	kg/10a	100	202	193
てんさい	kg/10a	5,410	4,101	2,397
りんご	kg/10a	1,401	1,355	-
ぶどう	kg/10a	1,000	1,140	-
青刈とうもろこし	kg/10a	4,851	4,749	4,828
牧草	kg/10a	3,398	3,129	3,411
生乳(H12)乳検成績	kg/頭	8,336	8,001	8,267
生産農業所得 農家一戸当たり		5,341	3,831	3,828
耕地 10a当たり		33	51	19
専従者一人当たり		3,024	2,101	2,507

注:表1~3 しりべしの農業 2001(データ編、H13.3 後志支庁農務課)

北海道統計書(第108回、道総合企画部統計課)

平成12年検定成績集計結果(H13.6、十勝乳検連・十勝農協連)より作表

「」と題する目標年次が平成十六年度の「黒松内町農業振興計画」を樹立。その見開きに谷口町長のことばがあり、町の農業の取り組みと決意が語られる。一部分を紹介してみよう。

「」の計画では、「フロンティア21」をキーワードとして、経営を意識した農業の原点からの見直しと体质の強化を図り、二十一世紀に向けての食料の安定生産機能や多面的機能の十分な発揮という国民的期待に先導的に応えうる、活力と魅力ある黒松内町農業・農村を再構築する



黒松内町農業振興計画



役場 まあたらしい分庁舎
産業課もここに

こととしたしました。町といたしましても、この計画がただ単なる目標に終わることなく、黒松内農業の再生に向けての第一歩となり、より効果的に農業振興の各種事業が実践できますよう、取り組んで参る所存であります。」

さて、この連載のNo.27「黒松内町」の原稿のマス目を埋めるハメになつた筆者であるが、平成十一年から複数の課題に関しプロジェクトの一員として黒松内町に何度もお邪魔をし、大方の酪農家の玄関に辿り着け

るようになつたことがその理由らしい。黒松内とはなかなか縁が切れない、いや縁をきりたくない良いマチである。ただ、一言不満めいたことがあるとすれば、ここの中農家はファーム名を掲げている農場が大変少なく、表札自体めつたとお目にかかるないことが多い。五万分の一の地図を片手に約束の時間までに訪ねあてなければならず、玄関で「〇〇さんのお宅ですね」と声をかけ、「ハイ、そいつですが」と聞いて安堵の胸を撫で下ろしたことがしばしばだった。

「黒松内町農業振興計画」を実際に推進する町のスタッフを紹介しよう。町長の決意についてはいましがた紹介した。総務課長の増田氏は前産業課長であり、この農業振興計画の企画立案に手腕を発揮されるなど農業施策について大変造詣が深い。産業課長の佐藤氏は民政畠を経験され町の施策全般に明るいバツフ

ルな方。政策主幹の福田氏は産業課のスポーツマンで、昨年の春から道農政部からの派遣職員として赴任、気軽に相談役に徹している。この度の取材においても全面的な協力をいただいた。産業課の辣腕係長こと下村氏は、産業畜産行政に精通し農家をくまなく掌握しておられ、調査においても協力をいただいたが、農家の信頼も厚い。

産業課は農政係、畜産係、土地改良係と特産品開発室（後述する町の特産品加工センターの「トワ・ヴェール」、展示即売施設店舗の「トワ・ヴェールII」）の管理運営、ちなみにt o i t vertとは「緑の屋根」の意）それに農業委員会事務局を加え、一二名ほどの職員で町の産業関連の事務から現場対応まですべての業務をこなしているのだから驚きである。職員は住民にとって何が必要かを判断基準に、町長の代理として即断即決を心

表4 主要作目の計画目標年（平成16）における生産性向上等の指針

作目	耕種部門 作付面積 ha	生産量		労働時間		生産コスト	
		kg/10a	現況対比	hr/10a	現況対比	円/10a	現況対比
水稻(モチ)	80	450	114	22.8	97	72,707	95
馬鈴薯	116	3,500	113	24.3	97	121,091	95
大豆	37	270	120	9.9	97	53,678	95
小豆	40	240	117	11.8	97	49,596	95
小麦	20	420	175	2.2	96	37,054	95
てん菜	40	5,600	117	14.5	97	68,006	95
大根	25	5,500	122	50.6	97	391,021	95
長ねぎ	2	2,500	124	89.6	97	312,000	95
牧草	2,850	4,000	117	-	97	-	-
青刈とうもろこし	200	6,000	123	-	97	-	-

畜産部門	1頭当たり搾乳量 kg		経産牛1頭当たり hr	乳脂率3.3%換算生産		
	7,752	102	93.6	93	51	98
酪農	分娩間隔(カ月)	12.6	1頭当たり hr	繁殖・肥育牛1頭当たり	186,300	97
肉牛	96	60.0	95			

酪農	肉牛			
	乳用牛総頭数(頭)	肉用牛総頭数(頭)	2,935	98
うち成牛頭数	1,582	102	うち専用種	2,920
うち経産牛頭数	1,486	107	うち繁殖牛	1,177
生乳生産量(t)	11,519	105	うち肥育牛	1,677
			うち乳用種	15
				50

資料：黒松内町経営・生産対策推進会議「地域農業マスター プラン」平成13年4月

現況対比の基準年は平成11年実績

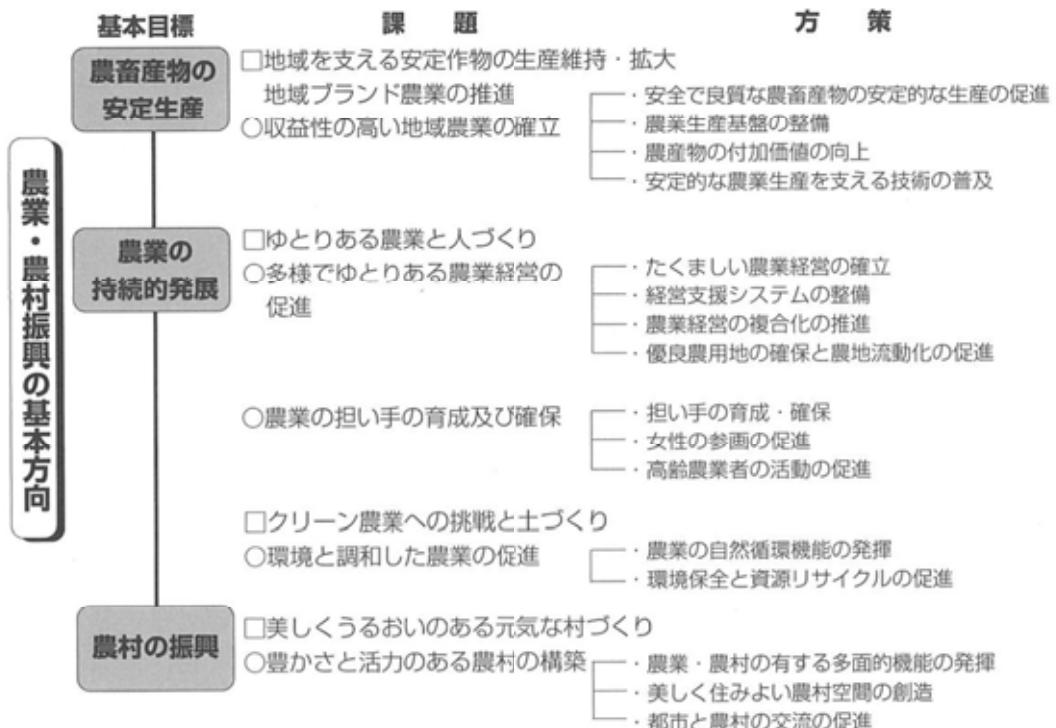
掛けていること。その結果であろう、役場に親近感をもつ町民の声を多く耳にした。都市住民には到底味わえない住民感覚であり大変羨ましく、同時に裏方の皆さんのご苦労を思うのである。

本筋に戻そう。この農業振興計画では、農業概況を次のように総括し、課題と方策を示している。

基幹作物である酪農部門は、飼養農家数、飼養頭数、生乳生産量の減少からみて停滞から低下傾向を迎っている。酪農部門は一九八五年、地域の農業粗生産額のおおよそ四九%を占めていたが、九年には三七%へと低下しており、酪農の衰退が地域の経済に大きな影響を及ぼすことが懸念される。このような背景には、八〇年代に多頭化による規

- 模拡大を図ったものの、乳価の低迷により償還金が経営を圧迫して再投資を阻んでいること、後継者不在などから離農が続いていることがある。このような現状を開けるためには、①酪農経営に対し生産者から經營者としての意識改革、自立精神と優れた経営感覚を養うことが必要不可欠である」と、②労働力、技術力、資本力などからバランスのとれた経営規模と合理的な生産方式の選択に徹すること。
- ③農作業受託組織（ファーム・コントラクター）の活用による農作業の効率化、機械導入に伴う償還金、修繕費、減価償却費などの生産コストの低減、過重労働力の解消を図り、土地、労働、資本の生産性を高めること。
- ④遊休地や家畜ふん尿の利用により良質な自給粗飼料の給与量を高め、生産コストの低減

【計画の組み立て】



と乳質改善に努めること。
 ⑤法人化、協業化により強じんな経営体質への転換を図ること。

また、稻作、畑作、肉用牛経営においても農業生産を取巻く環境が厳しくなつていくことは同様であり、今後、消費者の「一々に応える」というに示される一六の方策についての具体的取り組みは、紙面の制約から紹介できないのであるが、実にきめ細かな「施策」を図ること。

この「施策の展開方向」は相互に連関しているのであるが、課題からトピック的に取り上げて紹介してみたい。

〇課題：収益性の高い地域農業の確立から「農畜産物の付加価値の向上」

地域の農業が安定的に発展していくためには、有機栽培など安全性や品質による差別化、鮮度保持、安定出荷や流通加工の一層の取組みによる付加価値の向上、生産者の顔がみえる多様な流通形態の拡大、地場農畜産物の加工流通への積極的な取組みなど、さまざまな取組みを通じて、消費者や需用者のニーズに確に応えた農畜産物の生産・供給によって、ブランドの生

要素（耕地面積、保有労働力、資金力）のバランスのとれた経営への転換を早急に進めが必要があることは酪農經營と同様であるとしている。目標年次における主要作目の生産目標は表4のとおり。計画の組み立て（振興計画書より転載）は、表にあるように、三つの基本目標と五つの課題に一六の方策をもつて構成されている。



特産物展示販売施設「トワ・ヴェールⅡ」



特産物加工センター「トワ・ヴェール」

確立、有利販売、付加価値の向上を目指すとしている。

地域の特産物は加工产品との関係でみると、酪農畜産物では

生乳と牛・豚、稻作は耐冷性の「白鳥モチ」、馬鈴薯・小豆に小麦、ブドウがあがつてくる。

施策の一つとして特産物手

り加工センターの加工技術の向上と新製品の開発による地場農畜産物の利用拡大を進めている。

その具体策の一つとして、特

産物加工センター「トワ・

ヴェール」は、役場の北西約3kmの牧草地の小高い丘に緑の屋根を載く城のような佇まい。

製造のスタンスは、余分なものは加えない「素材」を活かし本

物の味にこだわる。アイスク

リーム、チーズにハム、ソーセージを製造。自慢のチーズア

イスクリームなど四種の開発

を手掛けた乳加工室の吉竹

チーフは、そのこだわりを「自然を愛しつづける黒松内だから

らじれる」のだと。製造ラ

インを見学後は、展望の利ぐ二階の軽食レストランで味わい楽しむことができる。

○課題：多様でゆとりある農業経営の促進から「たくましい農業経営の確立」

地域の農業者には、「生産者から経営者へ」という意識の下で新たな活力が芽生えつつあり、農業経営の生産性の向上を促進することとも、収益性の高い優れた経営の確立を図ることに努める一方で、地域の農業を担つていく経営主体の発展を促すため多様な経営形態の展開によって、経営の質的向上を図るとしている。農村景観を生かし地場の農畜産物やその加工产品的販売、ファームインやレストラン、観光農園などに取組む経営の多角化を推進している。

特産物展示販売施設「トワ・ヴェールⅡ」は、国道5号沿い

の黒松内町玄関口に位置する。

ここは特産物の展示・即売に、町の自然と文化の情報発信基地としての道の駅「くろまつない」

を兼ねて賑わっている。少し勝手の違うレストランではあるが、地元の素材を活かすこのレストランにパン工房も併設されており、焼きたてのパンが楽しめる。

工房には、こだわりのパン作りに励む佐藤さんがおり、一〇〇%黒松内産ベーグルなど新商品の開発に奮闘している。

アスパラガスやねぎ、馬鈴薯などの即売に、売店を観けば、前述の酪農畜産加工產品の他、モチ米と北限のブナ林から湧き出る清流とで醸し出されるモチ吟醸酒「横のせせらぎ」やシリーズの純米酒・にじり酒、「横しづく」シリーズの焼酎など銘柄が豊かであり、またブドウはセイベル種を「横のさややき」など、それぞれ委託醸造されたものが並んでいる。その他、天然アル

カリイオン水は「水彩の森」、牛乳は「風薫る」の商品であったり「ミルクまんじゅう」や「ふな林最中」「鮎の飯すし」など地元の产品多数がある。

○課題：農業の担い手の育成及び確保から「担い手の育成・確保」

地域農業の多様な経営形態の展開とその担い手の育成を図るために、農家の子弟はもちろんのこと、就農ルートを通じて多様な人材を確保・育成に努めるとともに、農家の嫁・婿不足の解消に機会と交流の場を設けるなど、あらゆる手立てをつくし努力している。

イベントを紹介しよ

う。六月下旬の「「ナ・ウォッチング」、冬には雪の上を歩く「かんじき



かんじきブナウォッチング

ブナ・ウォッチング」がある。共に歌才ブナ林を散策する自然体験で自然派にはたまらない。冬のインベントといえば一月下旬の「かんじきソフトボール大会」、かんじきを作り続ける渋谷さんの功績をたたえて始まった。昭和六十三年全国大会となり四〇チームもの参加がある。

チームを行なったそうだが、今は「ブナ北限の里」をキャッチフレーズに交流のための施設はかなり整備されている。「歌才自然の家」、「黒松内温泉ぶなの森」、「歌才オートキャンプ場」他、各種スポーツ施設や「ブナセンター」などの研修施設がある。

さて、就農援助条例に基づく新規就農者を支援する優遇措置の一部を紹介しておこう。

資格条件

- ア・個人経営／年令一〇才以上六五才未満
- イ・共同経営／年令一〇才以上三〇才未満三名以上
- の方が一定の経営条件を充たすとき、

- ② 経営自立安定補助金／農業関係経営資金などの制度事業費の三・五%（限度額三〇〇千円）
- ③ 利子補給／農業関係経営資

真夏は七月下旬の「ビーフ天国」、町営球場で開催される黒毛

和種の焼き肉バーで、函館や札幌方面からの大勢の家族連れで賑わっている。また、秋



かんじき
ソフトボール大会



ブナセンター

金に対し、経営開始の属する年度から、五年間三・五%を超える部分（補給金算定基礎限額は、ア 五〇、〇〇〇千円、イ ハ〇、〇〇〇千円）

○課題：農業の担い手の育成及び確保における女性や高齢者から「女性の参画の促進」

地域社会の活性化に大きく貢献する農村女性の役割は、正し



自然体験学習宿泊施設 歌才自然の家

く評価していくとともに、都市と農村の交流など活動への参加を促すことや農村女性のネット化の推進を図り、その役割が十分發揮を図り、その役割が十分發揮できる環境づくりにも努めるとしている。この実現の取組みの一つに前述の地場の特産加工品づくりや産地直販などに取組む農村女性グループの活動などがあり、これらを支援し推進している。

○課題：環境と調和した農業の促進から「環境保全と資源リサイクルの促進」

食料の安全性や環境問題への国民の関心が高まるなかで、農業生産活動が環境に与えているマイナスの影響を解消するための方策については、農業生産廃棄物の適正な処理に努め、地域の自然環境、生態系と調和した持続可能な農業の確立を図るとしている。この実現化の一つの柱に、家畜ふん尿について耕種

農家の広域連携による循環利用や土壤菌などを利用した急速堆肥化施設と無臭化技術の推進に取り組んでいる。熱郛地区に

高速堆肥製造センター（生産堆肥はJAようてい管内で広域利用）が平成十六年に操業予定。

建設予定地のそばの仮実験施設でこの夏、関係機関の技師が堆肥製造テストを繰り返しておられた。この施設と運用システムの検討は、現在大詰めに入ったと聞いている。自家の農場から生堆肥の持ち出しつばなしにはならないか、原料供給者は必要な量の堆肥還元の利用を必要経費とともに見込む構えを先ず持つことである。「家畜排せつ物の管理の適正化及び利用の促進に関する法律」の規制をクリアするうえに、大切な時間を自分

いものだ。それが豊かな酪農郷の実現につながると私は思う。

○課題：豊かさと活力のある農村の構築「都市と農村の交流の促進」

農業・農村が有する多面的機能の発揮に対する国民の期待を背景に、グリーン・ツーリズム、体験農園、山村留学などの都市と農村の交流活動がますます活性化している。こうした農村の

もつ多面的機能の重要性について、この地域は一早く認識し、自然とのふれあいと景観の保持に真摯に取り組んできており、町民の意識の高さを感じる。

北限のブナは、一九一八年（昭和三年）に国の天然記念物の指定を受けた。幾度も襲いかかったブナ伐採の危機はここにある町民の熱意で回避され、原生の姿を今に残しているのである。このブナがとりもつ縁で「二十世紀スイス村構想」を策定し、

ミルクとシルクを推進する四国は愛媛県野村町と平成五年に姉妹町に。黒松内町を訪れる自然爱好者は年間約九万人、そのビジターを町は観光客と呼ばずに「交流人口」と呼ぶ。移住組もあらわれており、町は宅地・住宅対策や移住者等定住対策・雇用



天然記念物 歌才ブナ林

川地区に就農し畑作農家として馬鈴薯の産直で頑張つて田代夫妻、九一年(平成四年)東京からの平成入植者である。「実際に食べててくれる人の顔が見える農業がしたい。そのためには自分で売る力も必要」と語っている。また、脱サラし訓練学校で木工技術を修得、八年間修業のうち、九七年兵庫県から移住した西馬夫妻。廃校の小学校に新たな文化を発信する工房「WEST HORN」を経営、手づくり家具の制作販売の傍らブナセンターで

木工教室を開き、地域との交流を積極的に行っている。一方、こんな山奥にと思われるところだが、添別ブナ林を窓望できる喫茶店、名前も「ファーガスボイント」を、九四年にオープnedした柳沢夫妻がいる。その二年前に札幌から移住、きっかけは真冬の歌才ブナ林を歩くイベント「かんじきブナウォッチング」で、移住はその時のボランティアガイド、酪畑農家でブナ林の保全に尽力されている

対策・新規就農対策等々に力を入れて「住んでみたくなるまち」「住んでよかつたまち」を目指した地域づくりを進めていく。移住組を二三紹介する。中の川地区に就農し畑作農家として馬鈴薯の産直で頑張つて田代夫妻、九一年(平成四年)東京からの平成入植者である。「実際に食べててくれる人の顔が見える農業がしたい。



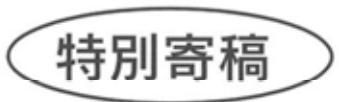
ミニビジターセンター

富田氏の力添えによると聞いているが、自然もさることながら人物同士互いに意気統合したのであろう。静かにゆつくり憩える場”が店のスタンス。結構若い人達が訪ね来るようである。すぐ近くに草原の丘につづくブナ林が、入り口にはミニビジターセンターがある。四季折々に「また訪ねてみたい」という心情こそは、これから町ではあるまい。併まいに自然に湧く心情こそは、これから町おこしを考えるとき大切な要素ではなかろうか。

□ 取材をとおして □

ここに紹介したのは、ほんの一部にすぎない。「施策の展開方向」の一つ一つの一日も早い実現こそが、黒松内町の農業の再生ひいては町の繁栄に繋がることと祈念して止まないのである。

特別研究員 横山 瑞



番外編

東京における 大衆酒場の一般形態

—首都東部および北部を中心に—

ペンネーム

碓田 素州

想像してみてください。今日も仕事が忙しかった。何故か上司は機嫌が悪い（また娘の家出か？）。さらに顧客からは不条理なクレームが・・・。まったく、なんていう一日だ。しかし、男たるもの仕事のストレスを家庭に持ち込むわけには行かない。家に帰るまでの間に「家庭モード」へと気持ちを入れ替えなくてはならないのだ。

魚介類のうまい居酒屋で大吟醸をちびちび。または、カツオケスナックで一八番を熱唱。それとも、×××なお店で××××

（編集長検閲）でしょうか。できればフルコースと行きたいところなのでしょうが、家庭持ちのオヤジの小遣いなんてタ力がしれています。それに、そんな気分の時には、同じ職場の連中となんかと一緒に飲みに行きたくなんかありませんよね。

筆者は、こういう場合、「一人で「大衆酒場」に足を運びます（実はほぼ毎晩なんですけど・・・）。この大衆酒場なる飲み屋は、昨春まで一〇年以上住んでいた北海道ではあまり見かけませんでしたが、東京都特別区内には数多く存在しております。特に、山手線より東部と北部にある水害に弱そうな地帯、すなわち北海道民には知らないマイナーな繁華街・商店街・住宅街に素晴らしい酒場が数多くあります。

はじめに

今回は、くたびれきつたオヤジ達の魂を再生させるオアシスである東京の大衆酒場を紹介させていただきます。思い起こせば人心冷害穂発芽ブリオン地帯の札幌にはオアシスなど何処にもなかつた（あくまで筆者にとつてですが……）。



▼ 大衆酒場の典型的パターン

一般には、「居酒屋」と称する店よりも一人あたり利用料金の低い客層を対象とした酒場を意味し、店によつては暖簾や看板に「大衆酒場」と記述されております。

本稿では、そのような飲み屋のなかでも、

①一人客が中心（カウンター席の場合が多い）

②チーン店ではない（暖簾分けはOK）

③手作りの料理を出す

④料理の種類が豊富（焼鳥屋、おでん屋等の専門店は除く）

⑤安価（酒十つまみ十税＝1000円未満で満足）

⑥座つて飲める（立ち飲み屋）は別の機会に紹介します。
ようなタイプを大衆酒場の範囲とすることにいたします。

ところで、和歌山駅前には「大衆」を掲げる店舗が多く、なかには「大衆理容」なる理髪店がありました。いつたいどんな髪型にされてしまうのでしょうか。

二、本稿における評価機軸

①料理が美味

飲食店である以上、最も重要な項目です。店舗の性格上、単

価の高いものは出せない」といふが、その制約のもとで、いかに美味しい料理を客に提供できかいるのかが重要になります。

②一見客にでも入りやすい

どの店でも常連客がいるのは当然ですが、一見客に対しても店員がきちんと心配りをすることが重要です。店の性格（＝包容力）が、そのまま常連客の性格にも表れるので、良い店では常連客の態度も気持ちいいものがあります。

③一人客がくつろげる

チーン居酒屋などは、たいていの場合、収益性の高いグループ客を前提とした店内構造になっています。これでは一人客は落ち着きません。良い店は、後述する店の構造はもとより、孤独に飲んでいても、また隣に座った客と一緒になつて騒いでもくつろげるものです。

④店員が威張らない

あたりまえのことですが、あえて書かせていただきます。客と店員は、金銭を媒介として限定的な主従関係にあるはずです。教習所みたいに、お金を払ってわざわざいやな思いをする必要なんてないはずです。一般に、この傾向が強いのは料理が単作化した店舗です。たとえば、寿司屋、焼鳥屋、おでん屋（何故か老婆婦人が多い！）、ラーメン屋などでしょう。料理が単純化すると作る人も単細胞化するのでしょうか？ そういえば、農業経営者でも、大規模単作経営では同様の傾向が見られるようです。

三、大衆酒場の典型的バターン

① 外観

まず、入口が広く、2間以上あることが多いようです（入り口が一力所ある店も多いです）。そして紺色の大きな暖簾に白字で「屋号」や「大衆酒場」等と書かれています。建物自体は古くさいものが多く（たいてい夜に行くのでよく見えないが・・・）、古ければ古いほど味わいが深くなります。

② 内装

一人客が中心なので、「U」の字のカウンターがある場合が多く、カウンターの内側には煮込みやおでん鍋が置いてあります。調理場はその奥にあります。壁にはメニューの札が下がり、小

大衆酒場人々①



② インテリ (intelligent) トロッキー



さな神棚と年代物のラヂオがあつたりします。全般に内装はシンプルです（窓の目的も単純ですから）。

③

家族、特に老夫婦で経営している場合が多く、夫・厨房、妻・接客というバターンが多いようです。夫が調理しながら接客とすることもありますが、夫が感じのいい店は妻の感じが悪い場合が多いようです。夫婦は補完するものなのでしょうか。

④ 飲み物

ビールと焼酎と日本酒など普通の酒がメインですが、梅割、黒ビール、泡盛、デンキブラン、ホッピー、牛乳割、等々独特のものがあります。

③ ハーモニ系



④ 分類不能



代表的大衆酒場の紹介（初級編）

今回は、雑誌・グルメガイド等にもよく掲載されている四店舗を紹介いたします。というのも、大衆酒場巡りをしていると、だんだんとより場末の、よりティーブな、そしてより終末的な酒場を求めるようになってしまふ（気がつけば立ち飲み屋にいる・・・）ので、初級者が理解できそうな有名店を対象としました（価格はすべて税込み）。

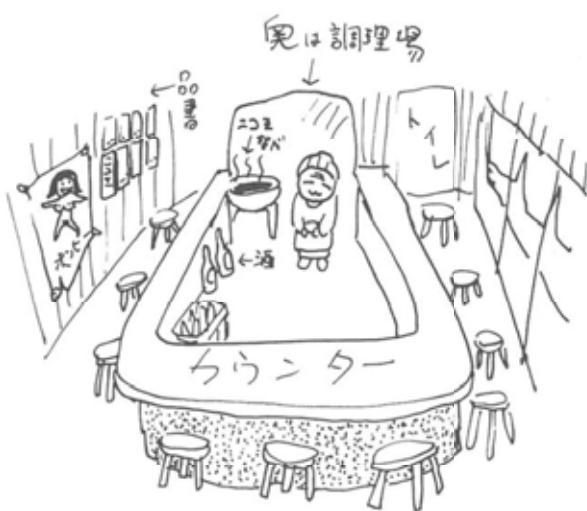
一）岸田屋（中央区月島）☆☆☆☆★
「究極」でおなじみの京美食マンガ（後から食べた方がいつも勝負に勝つのは何故でしよう？）にまで紹介された有名店。月島は「もんじや焼き」で有名な街ですが、小樽の寿司屋通りの

⑤

よくある料理としては、まず「煮込み」があります。一般には「モツ煮込み」と同じものと解釈していただいて結構ですが、味付けや使用する肉に各店で強い個性があります。待ち時間が短いので一番最初に「とりあえず」注文する場合が多いようです。狂牛病発生後は「牛」「豚」に使用肉を変更した店も見られます。その他よく見かける料理は、奴、ボテトサラダ、アシフライ、玉子焼き、めざし、谷中しょうが、らつきょう、おひたし（江戸弁では「おしたし」）などでしょうか。

ようにもんじや焼き屋群が不自然に広がり名古屋的終末感を漂わせるなかで、残り少ない良心を感じさせる店です。

紺色の暖簾をくぐると、十数人「の字のカウンターがあり、感じの良い老婦人が迎えてくれます。名物は煮込み（四〇〇円）で、八丁味噌の風味がする甘辛い味付けは格段に美味です。トトロは、魚介類を中心に何を食べても間違いはありません。仕上げは煮込みや煮魚の煮汁をご飯にかけて、つみれ汁（一五〇円）をいた



だけは満足して帰れる

でしそう。

ちなみに酒は、日本酒一合三一〇円です。

ただし、

猫がカウン

ターに上つ

てきたりす

るので、動

物嫌いの方

にお勧め

しません。

一) まるます屋 (北区赤羽) ☆☆☆★

朝九時から営業している「有名」になつた酒場ですが、都内ではめずらしいものではありません。特に場外馬券売場周辺では当然のように存在しております（そして夕方には閉店する）。普通のサバコーマンには夢のような世界です。

間口の広い入り口が一ヵ所あり、「の字カウンターが二つと

テーブル席、さらには一階にも席があるようです。ここは隅田川が荒川から分流する近くにあることもあり、鰻や鯉という川

魚料理がメインです、蒲焼きは八〇〇円から、鯉のあらいは三五〇円です。また、その他つまみの種類も豊富で、筆者のおすすめはゲソ天（三五〇円）です。なお、食事もでき、うな丼は肝吸い付きで七五〇円、うな重は一〇〇〇円からです。そうそう、お酒は札幌赤ラベル（五〇〇円）が飲めるのがいいです。

ただし、接客についてはひさか問題があり、特に老婦人たちはお釣りをじまかす傾向があるようで注意しましょう。

二) 大はし (足立区千住) ☆☆☆☆

この店は、「の字カウンター」とテーブル数卓の典型的な大衆酒場であり、名物の煮込み（三一〇円）を筆頭に料理もうまいのです。が、何よりも接客担当の父の職人芸の客扱いに感激します。父も子も、客から注文を受けると、まるで時代劇の火消し役のような典型的な江戸っ子風のしきはざとした応対をいたします。と

「父の方（四代目）は七十歳を越えているようですが、「あらよ！」とか威勢良く返事しながら、狭いカウンターのなかを猛スピードで歩き回ります。ついで、この一人にみどりて飲み過ぎないように注意します（反省しています）。

四) 齋藤酒場（北区十条）★★★★★

十条という街は、「東京一物価が安い」とも言われています。そのせいか、この店の特徴はその価格の安さです。まず、お酒は一杯一六〇円、泡盛は一一〇円です。（まみ類も多くの二〇〇円代で、名物のボテトサラダとカレーハッシュは一〇〇円、マグロぶつが一五〇円です。しかし、それ以上にこの店の魅力は、接客を仕切っている感じの良い老婦人になります。筆者が子供の頃のテレビドラマで言えば、「京塚昌子の心を持つた菅井きんが磯野フネのような割烹着を着て接客をしてる」ような懐かしさと安心感が得られます。

▼おわりに

実際に飲んでみないと実感できないこともありませんが、

東京の大衆酒場と北海道の酒場との違いは、まず、日常の一部として一人で気軽に飲むことができるということです。大都市札幌といえども、一見客が一人でふらりと行ける店が少ないの

で、気構えないとなかなか飲みに行けません。そして、もう一つは店員の職人魂（アーフェッショナルとしての自覚）です。

北海道では、職人魂→うまいものを作ることに労力を集中→接客をおろそかにすること、このように誤解されているような気がします。たとえば、地下鉄南北線・平岸駅前には、なかなか渋い飲み屋街がありますが、一見客がふらりと焼鳥屋に入店してみると、寿司屋やラーメン屋みたいに店主が威張つたりします。

サービス業の基本は、お客様をもてなす心がけであると思います。残念ながら、北海道は第三次産業の比率が高い産業構造であるにも関わらず、お役所（これもサービス業だ！）を中心社会なので、飲食店までもお役所化しているようです。筆者がずっと北海道で感じていた居心地の悪さは、「全道お役所状態」ともいってべき屈辱しさと無力感だったようです。で、結局、最後は同じことを書くことになるのですけれども、北海道には、せつかくこれだけ美味しい農産物や魚介類が安く豊富に入手可能であるのに、一人の一見客が気軽に楽しめる飲食店が少くないことが残念でたまりません。

ただ今、内地に暮らせて幸福です。

がんばれ、北海道のオヤジ達！

掲示板

研究会・研修会等への 報告者・講師の派遣

(平成十三年十月～)

平成十三年十一月)

講義 七戸長生

(当研究所・所長)

○第8回韓農業シンポジウム
【楊口(ヤングー)地域セミナー】

主催 韓国江原道大学・北海道

大学・楊口(ヤングー)郡

とき 平成13年10月17日

テーマ 日本・北海道の農協による
産地育成実践事例事例

講義 黒澤不二男

(当研究所・常務理事)

黒澤不二男

(当研究所・常務理事)

○平成十三年度北海道農業経済
学会秋季大会シンポジウム

主催 北海道農業経済学会

とき 平成13年11月20日

テーマ 地域農業の確立を目指し
た多様な取り組みに学ぶ

主催 北海道農業経済学会

とき 平成13年11月9日
テーマ 地域農業構造改革と農業
法人の可能性

報告 黒澤不二男

(当研究所・常務理事)

○長沼農民塾

主催 JAながぬま

とき 平成13年11月15日

テーマ 世界の食料需給の現状と
見通し

講演 黒澤不二男

(当研究所・常務理事)

○共和町収穫感謝祭農業講演会

主催 共和町

とき 平成13年12月4日

テーマ 地域農業支援のための
労働力補完システム

講演 黒澤不二男

(当研究所・常務理事)

講義 黒澤不二男

(当研究所・常務理事)

○旭川市農業生産組織一日研修会

主催 旭川市

とき 平成13年11月20日

テーマ 地域農業の確立を目指し
た多様な取り組みに学ぶ

黒澤不二男

(当研究所・常務理事)

○平成十三年度北海道農業問題総合
研修会パネルディスカッション

主催 北海道地域農業研究所
とき 平成13年12月14日

テーマ 北海道農業活性化の方策
から経営政策

講演 黒澤不二男

(当研究所・常務理事)

テーマ 北海道農業活性化の方策
をさぐる

講演 黒澤不二男

(当研究所・常務理事)

テーマ 北海道農業活性化の方策
をさぐる

講演 黒澤不二男

(当研究所・常務理事)

○平成十三年度農業経営指導マ
ネージャー等研修会

主催 北海道農業会議・北海道

とき 平成13年12月19日

テーマ 新経営政策で農業者に求
められる課題と経営改善

講演 黒澤不二男

(当研究所・常務理事)

の支援

○農業フォーラムーあつま
講演 黒澤不二男

(当研究所・常務理事)

とき 平成13年12月6日

テーマ 地域に根ざした農業生産
と地産地消の拡大

テーマ コーディネーター

黒澤不二男

(当研究所・常務理事)

◇◇雑誌等への投稿◇◇

「大規模畠作経営構築のための

DATA FILE

関連事項/ DATA

(財) 北海道農業開発公社

〒 060-0005

札幌市中央区北 5 条西 6 丁目

☎ 011(271)2231

ホクレン農業協同組合連合会

〒 060-8651

札幌市中央区北 4 条西 1 丁目 3 番地

☎ 011(232)6108 広報宣伝課

北海道大学 農学部

〒 060-8589

札幌市北区北 9 条西 9 丁目

☎ 011(716)2111

日本女子大学

〒 112-8681

東京都文京区自白台 2-8-1

☎ 03(5981)3507

北海道 農政部

〒 060-0003

札幌市中央区北 3 条西 6 丁目

☎ 011(231)4111

J A 北海道中央会

〒 060-0004

札幌市中央区北 4 条西 1 丁目

☎ 011(232)6405

J A ようてい

〒 044-0011

虻田郡俱知安町南 1 条東 2 丁目 5-2

☎ 0136(21)2311

黒松内町

〒 048-0192

寿都郡黒松内字黒松内 302 番地 1

☎ 0136(72)3311

(社) 北海道地域農業研究所

〒 064-0004

札幌市中央区北 4 条西 7 丁目 1

☎ 011(281)2566

E-mail : kaihou@chiikinouken.or.jp

支援策のあり方

二ユーカントリー

2001年 12月号

北海道協同組合通信社

2002年 1月号

全国農業改良普及協会

編集後記

お詫びと訂正

「地域と農業」第43号（秋号）

に誤りがありました。
P33 図2下段の単位

20000→2000
40000→4000
60000→6000
80000→8000
100000→10000
120000→12000
140000→14000

黒澤 不一 男
「新経営政策の課題と農業者の
対応」
北方農業 2001年 12月号
北海道農業会議
黑澤 不一 男
「北海道における労働集約型作
物導入と普及の取り組み」
技術と普及 VO-39

今回の特集今村先生の講演を再度
読み返してみて、どんな業種でもボ
リュードと意欲を持つリーダーが育
つならその地域は元気になるとい
うこと改めて感じた。「不況でリスト
ラップされた人よあまい!」というよ
うな気概を持つ北海道農業の振興
策を考えたい。
加工野菜の現状のレポートも興味
深い。農協・系統が生産した農産物

ヒット商品は生まれない。近鉄の中
村選手ではないけども「全球ホーム
ラン」をねらうような研究スタッフ
と、それを支える経営者が必要だろ
う。今年は北海道産のヒット商品を
期待したい。系統がそのような加工
に乗り出すのは既存の取引に摩擦が
生じたり、開発費用の心配もある。
今まで取り組んだこともないし失敗
したくないしようという気持ちも理
に、さうに付加価値を付ける事は
もっと果敢に取り組む必要があら。

日本の食品の流通は複雑で、おまけ
に消費者にも気を遣わなければなり
ない。しかし様々な試行錯誤なしに
ヒット商品は生まれない。近鉄の中
村選手ではないけども「全球ホーム
ラン」をねらうような研究スタッフ
と、それを支える経営者が必要だろ
う。今年は北海道産のヒット商品を
期待したい。系統がそのような加工
に乗り出すのは既存の取引に摩擦が
生じたり、開発費用の心配もある。
今まで取り組んだこともないし失敗
したくないしようという気持ちも理
に、さうに付加価値を付ける事は
もっと果敢に取り組む必要があら。

解である。しかし当然生じのリスクを
共に抱つための協同組合ではないか。

稔りある大地とともに

エーコープ
くみあい 高度化成肥料

くみあい 粒状配合（BB）肥料



ホクレン肥料株式会社

代表取締役社長 足立 明

札幌市中央区北1条西3丁目3番地（札幌住友信託ビル）

TEL 代表 (011) 222-2444
FAX (011) 232-3597

FUJI
ELECTRIC

豊かな地球社会のために

富士電機株式会社

北海道支社

支社長 今泉 真一

〒060-0042 札幌市中央区大通西4丁目1番地（道銀ビル）

電話（代表）011-261-7231

POWER UP HOKKAIDO



夢大地の息吹が 大きくなっています。

まだまだ夢の途中…。
そんなあなたの情熱と熱意が
明日の北海道農業を支える力です。
私たちは応援し続けます



「農地保有合理化事業」が、 明日の北海道農業を支えます。

「農地保有合理化事業」とは、農用地などの買入れ、売渡し、借入れ、貸付けを行うことです。

*農用地の売渡し者が、買入れ協議によって公社へ農地を譲渡した場合、譲渡所得について1,500万円の特別控除が受けられます。

詳しい資料・ご相談は



財団 法人 北海道農業開発公社

〒060-0005 札幌市中央区北5条西8丁目1番23 農地開発センター内

TEL 011(241)5601 FAX 011(271)3776